

<平成 27 年度修士論文(静岡文化芸術大学大学院文化政策研究科)>

地域社会におけるシニア演劇の可能性  
—箕面市の劇団「すずしろ」を事例に—

Possibilities of the Senior Theatre in Community:  
A Study on Theatre Company “Suzushiro” Based in Minoh City

梶谷 智 Satoshi KAJITANI  
(論文指導：静岡文化芸術大学教授松本茂章)

目 次

要旨.....	1
第 1 章 研究内容と研究方法.....	3
第 2 章 シニア演劇と地域社会.....	6
第 3 章 劇団「すずしろ」.....	10
第 4 章 インタビュー調査.....	14
第 5 章 「中川モデル」による分析.....	21
第 6 章 結論.....	24
参考文献.....	29
図表.....	32

## 要旨

少子高齢化が進むわが国では、高齢者が地域社会の担い手になることが期待される。高齢者の社会参加を促すものとして芸術文化活動の重要性は高まっているが、いまだ個人の問題として扱われがちである。本研究では近年注目されつつあるシニア演劇を題材に、高齢者の芸術文化活動を地域社会との関わりの中で捉え直し、その社会的な意義を明らかにすることを目的とする。調査対象は大阪府箕面市の劇団「すずしろ」とする。同劇団は、設立に行政が関与した点と、プロ俳優が指導する点に特徴があり、ニューヨーク公演や全国シニア演劇大会の実施などの特筆すべき実績を持つ。調査方法は劇団および行政へのインタビュー調査である。

事例分析では中川幾郎の「自治体文化政策基本モデル」を参考に、「蓄積」「表現」「交流」の3つの視点から、劇団および行政の成果と課題を整理した。その結果、「蓄積」「表現」の側面では一定の成果を上げていることが分かった。具体的には、団員の意識が地域社会に向けられるようになったこと、公演を通じて他の高齢者に影響を与えていること、市の知名度向上に寄与していることなどが挙げられる。一方、「交流」の側面では課題もあった。劇団が地域に開かれた存在になるために、他世代や他団体との交流を促進する必要性が浮かび上がった。

事例調査・分析から、地域社会においてシニア演劇が担う役割として5つの可能性を指摘した。①社会参加のきっかけをつくること ②他の高齢者のロールモデルになること ③高齢社会の問題を地域で共有する場になること ④シティ・プロモーションの役割を果たすこと ⑤演劇文化の振興に寄与することである。最後にシニア演劇の発展条件として、高齢者、演劇人、行政の果たすべき役割をそれぞれ指摘した。

キーワード：シニア演劇 高齢者の社会参加 ロールモデル 地域文化振興 多世代交流

## **Abstract**

The aim of this paper is to show the social value of the senior theatre company from the perspective of cultural and artistic activities in the local community. The author surveys Theatre Company “Suzushiro” based in Minoh City. The survey is mainly through interviews with the company members and administrative agency. The author analyzes the object from three aspects: “accumulation”, “performance”, and “interaction”, proposed by Ikuo Nakagawa.

This study reveals that the members develop their consciousness of the local community and that their performances have a good influence on the other elderly people. It also shows that the theatre company is required to expand an active exchange between generations and social interaction with other groups.

In conclusion the author suggests the following five possibilities of the senior theatre company: 1. providing a chance for the members to strengthen community relationships, 2. presenting a role model for the older generation, 3. providing a good place for sharing the common problems of the aged society, 4. contributions for improving the city’s image, 5. fruitful developments of the theatrical culture.

Key words: the senior theatre, social participation of the elderly people, role model, promotion of the local culture, interaction between generations

## 第1章 研究内容と研究方法

### 1-1 研究背景・研究目的

2001年に制定された文化芸術振興基本法では、文化芸術が社会的成熟に不可欠の存在であること、市民一人ひとりの自主性が尊重されるべきであることが強調されている。また、地方分権化が進み、東京一極集中の是正が課題とされるなか、市民、芸術団体、行政等が協働して魅力ある地域文化の発展に向けて取り組むことが期待されている。これまで、新たな主体形成としてのアートNPOの可能性が論じられ(曾田 2006)、自治体文化政策における地域ガバナンスの重要性が指摘されるなど(松本 2011)、地域市民を含めた多様な主体の参加が、地域の文化振興に欠かせない要素として求められている。

近年、芸術にはソーシャルキャピタルの形成やコミュニケーション教育などの社会的な効果が期待されており、医療・福祉・教育・観光・まちづくり等、様々な分野で地域の課題解決を目指した取り組みがなされている。交流人口の拡大などを目的とするアートプロジェクトが開催される事例も増えている。

地域が解決すべき喫緊の課題のひとつに、少子高齢化がある。わが国の高齢化状況を概観すると、わが国の高齢者人口比率(65歳以上人口が占める割合)は26.6%(2015年9月現在)に達しており(総務省統計局 2015)、2060年には同比率が39.9%にまで増加すると推計されている(国立社会保障・人口問題研究所 2012)。同時に、わが国は世界有数の長寿国としても知られているが、平均寿命の延伸は老年期が長期化することを意味する。特に退職後の生活設計は重要であり、地域社会の中でいかに老後生活を過ごすのかという問題は多くの国民にとっての関心事となっている。

人口の高齢化・長寿化に伴い、社会における高齢者のありようも変化している。文部科学省(2012)によると、介護保険制度における支援や介護を要しない高齢者は、65歳以上で約8割、75歳以上で約7割といわれ、2002年の高齢者は1992年と比べて、通常歩行速度が11歳若返っているともいわれている(文部科学省 2012, p.2)。このため、少子高齢化の進むわが国では、健康で能力の高い高齢者に対して、地域社会の支え手となることへの期待が高まっている。『高齢社会白書(平成22年度版)』では、「元気な高齢者を孤立した高齢者の『支え手』に」と謳い、潜在的な支え手で

ある元気な高齢者をいかに顕現化させていくか、高齢者が人とのつながりをつくれる機会の提供、住民・ボランティア・NPOなどの民間と地方自治体や専門家が良好な「協働」関係を築くことが必要であると指摘している。同白書によれば、「まちづくり・むらづくり」「観光の振興」の分野ではボランティア・グループで働くスタッフとして、主婦について退職シニアが重要な担い手になっている(内閣府 2010)。これまで、高齢者は社会的に支援されるべき存在として扱われがちであったが、今後は地域社会の担い手としてより積極的な社会参加をすることが求められている。

社会老年学の研究では、高齢者が豊かな人生を歩むためには身体的に健康であることに加えて、社会参加や生きがいづくりが重要であると指摘されている(牧野 2009, p.25)、前述の通り、芸術文化には社会参加や新たなコミュニティ形成の効果が期待できる。高齢者も地域社会の文化振興の担い手として参加することが期待される。

しかし、これまで高齢者の文化芸術活動は、もともと趣味やレクリエーションといった個人の楽しみとして発展してきた経緯もあり、お金や時間に余裕のある人が行う余暇活動として捉えられる傾向にあった。また、生涯学習との結びつきが強く、これまで社会教育事業の範囲で支援されてきた。

自治体文化政策の展開へ目を転じれば、自治体文化政策の理念とは、それまで「個人の営み」として捉えられていた文化の問題を、「地域社会の文化という空間的そして集団的アイデンティティに関わる視点」から捉え直すものであった(小林 2010, p.64)。これを踏まえると、高齢者の芸術活動もまた、「個人の営み」ではなく「地域社会の文化」の視点から考えていく必要があると考えられる<sup>1</sup>。高齢者の芸術活動の意義を考える場合、高齢者個人にもたらされる影響だけでなく、地域社会に対してどのような影響を与えられるのか、という視点が必要であると指摘できる。

本研究ではシニア劇団に焦点を当てる。演劇を対象とする理由は第2章で詳述するが、シニア劇団の活動は、老人福祉、社会教育だけでなく、地域の文化振興やまちづくりなど、多様な分野での発展可能性を持っている。個人的な

<sup>1</sup> 高齢者の芸術文化活動といっても、芸術作品の鑑賞、創造活動、ワークショップ等への参加、作品批評など様々な活動が含まれている。本研究では、高齢者が主体となって創造活動を行うことを想定している。

趣味に留まりがちなシニア劇団の活動を地域社会とのつながりを持たせることによって、新たな可能性を探ることができるのではないかと考える。

以上より、本研究では近年注目されつつあるシニア演劇を題材に、高齢者の芸術文化活動を地域社会との関わりの中で捉え直し、社会的な意義を明らかにすることを目的とする。

## 1-2 調査方法と用語の定義

### (1)調査方法

本論文はシニア劇団についての事例研究を中心とするが、全国にどのような劇団が存在するのか、いまだ具体的な調査を行った文献がなかったため、事例研究を行う前段階として全国的な調査を行った。全国調査については、文献資料、新聞記事、インターネット検索を利用して、全国にどのようなシニア劇団が存在するのか、実態の把握を試みた。活動を確認できた劇団に関して、それぞれ設立年、活動地域、運営主体、指導者の有無などを調査し、一覧表を作成した。

事例研究については、シニア劇団の団員たちとその活動を支援する行政側の関係者に半構造化インタビューを行った。聞き取った内容をICレコーダーで記録し、逐語的な文字起こしを行ったものを資料として、分析した。

まず劇団に対する調査では、劇団の代表者、指導者、劇団員を対象とした。活動を支える中心人物である劇団の代表者・秋田啓子と指導者・倉田操からは、主に劇団の設立経緯、運営方法、活動実績などについて詳しく聞き取った。劇団員については、2015年9月4日から14日にかけて計5回稽古を訪問し、調査への協力を得られた15名の団員に対して、それぞれ1時間程度のインタビューを行った。団員からは、主に入団した動機と活動を通じて生まれた変化の2点について聞き取った。

また、シニア劇団と地域社会とのつながりを考えた場合、文化活動の支援者として行政との関係に注目する必要があると考えた。なぜなら、わが国では芸術文化を支える中心的な存在として行政が重要な役割を担ってきた経緯があるからだ。行政側に対する調査では、箕面市長・倉田哲郎、同市職員・杉山尚輝、公益財団法人箕面市メイプル文化財団職員・一階広充の3者にインタビューを行い、主に劇団に対してどのような支援を行っているかについて聞き取っ

た。

その他、補足として筆者が劇団から提供を受けた、観客のアンケート用紙、公演パンフレット、新聞・雑誌記事などの関係資料も適宜参照した。

### (2)用語の定義

高齢者に対する社会的イメージが変化してきていることは、前述した通りである。現在、わが国の公的文書などでは基本的に65歳以上を「高齢者」と表記されている。しかし、65歳を超えても就労や社会参加を通じて活躍する人たちが増えており、高齢者を年齢によって一律に区分することが必ずしも実態に即した定義ではないことが指摘されている(文部科学省2012、p.8)。加齢に伴う問題は個人によっても異なるため、年齢による区分は適切ではない。

したがって、本研究では年齢によって区分せず、シニア劇団の実態に即して、おおよそ60歳以上を「高齢者」と呼ぶこととする。「シニア」と呼称する場合もあるが、高齢者を指す言葉としていまだ定義が定まっていないため、本研究では高齢者を指す用語としては「シニア」を用いない。ただし、「シニア演劇」「シニア劇団」については、便宜上使用することとする。詳しくは第2章で述べるが、シニア演劇の活動目的や運営形態は非常に多様であるため一括りに定義することが難しい。ここでは「おおよそ60歳以上の演劇初心者が中心となっていく演劇活動」を「シニア演劇」とし、「おおよそ60歳以上の演劇初心者が中心となっていく活動する演劇団体」を「シニア劇団」とする。

## 1-3 先行研究・分析枠組み

### (1)先行研究

関連する先行研究については、高齢者が行う文化活動とアマチュアの文化活動に関して整理した。高齢者の文化活動については、認知症ケアや介護予防など医療・福祉分野における研究や、生涯学習の分野における研究が多かった。本研究ではアクティブ・シニアの活動を対象とするため<sup>2</sup>、後者について整理することとする。

高齢者の文化活動は、1970-80年代にかけて、自治体の社会教育事業の柱である高齢者学級を中心に発展してきた(辻2013、p.181)。高齢者が文化活動を行うことの意義につ

<sup>2</sup> アクティブ・シニアについては明確な定義がなされていない。本研究では「特別な支援を必要とせず、日常生活において元気で行動力のある中高齢期の人たち」と定義する。

いては、学習を通じて高齢者の QOL 向上を目指した研究の蓄積や(畑・草野編 2007)、高齢者同士の相互扶助を高める効果を指摘した研究などがある(間野 2003)。しかし、高齢者の活動が地域社会においてどのような社会的価値を持つのかという視点から詳しく調査された研究は少ない。

また、社会老年学における高齢者の社会参加に関する研究では、社会参加の 1 つの形態として趣味・サークル活動への参加が取り上げられる。しかし、文化活動はボランティアに代表される社会貢献活動よりも低いレベルの社会参加と位置づけられるため<sup>3</sup>、文化活動に焦点を当てた研究はほとんどない。

次に、地域におけるアマチュア文化活動の位置付けに関する主な議論を整理する。従来、公立文化施設の研究では専門性の欠如が問題視されてきた。清水(1999)は 1970 年代のわが国の文化政策を振り返り、「プロの創造」に対する意識が薄かったことを指摘し、パブリックシアターの 2 つの指向を示した。すなわち、優れたプロの活動を通じて、地域の文化向上と住民への芸術事業サービスを行う「プロフェッショナルシアター」と、地域のアマチュア創造活動支援と地域の人々への多様な事業サービスを行う「コミュニティシアター」の指向である。また、曾田(2007)は公立文化施設の公共性を論じたが、プロフェッショナルとアマチュアが分けて論じられており、プロフェッショナルの活動を地域の文化資源としてどのように活かすことができるのかという論点を中心となっている。

これらの議論に対して、川本(2010)はアマチュアの文化団体を私的な活動としてのみ捉えられている点を指摘し、「アマチュアの活動であっても、地域社会にとって価値ある活動もあり、その公共性を考えることも可能」であるという立場をとっている。本研究はこの立場に賛同しつつ、対象を高齢者の演劇活動に絞り、高齢者の文化活動が地域社会にとってどのような価値を持つのかという視点から研究を行うこととする。

## (2)分析枠組み

本研究では、中川幾郎の提唱する自治体文化政策基本モデル(以下、中川モデル)を用いて、「蓄積」「交流」「表現

の 3 つの視点から事例を分析する<sup>4</sup>。中川モデルは、松下圭一と森啓が提唱する自治体文化政策の理論を「MK モデル」として整理し、新たなモデルを構築したものである。中川は自治体の文化政策を整理・点検するために、3 つの主体(市民文化・都市文化・行政文化)、3 つの活動側面(蓄積・交流・表現)、3 つの資源(ヒューマンウェア、ソフトウェア、ハードウェア)から分析するマトリクスモデルを提唱している。

中川モデルは自治体文化政策の戦略を総合的に検討するための理論であり、都市経営や行政改革の推進なども検討の対象に含まれるため、本研究で対象とするシニア劇団の分析にそのまま適用することは難しい。したがって、今回は 3 つの主体のうち「市民文化」に絞って分析を行うこととする。アマチュア集団であるシニア劇団のありようとともに、劇団の活動を発展させるために、行政としてどのような支援をするのが望ましいのか、検討したい。中川は市民の文化活動支援について、「公共性に対する価値意識を有した市民層を形成することを、究極の目的とした政策」であるとし、「市民の私的世界としての内に向かう余暇活動支援の事ではない。(中略)市民の生活文化基盤における公共性の確立をめざすこと」であるとする。これは前述した川本(2010)とも類似する考え方であるが、本研究も同様の立場から、市民文化の担い手としてシニア劇団の活動を分析する。

中川モデルでは、活動側面に「交流」を加えた点に独自性があった。中川はモデルを構築する際に、梅棹忠夫の「チャージ・ディスチャージ論」を批判的に分析する。梅棹の理論とは「放電」と「充電」、すなわち「文化」と「教育」を対立概念と捉え、両者を切り離したものであるが、それに対して、中川は両者をつなぐ「交流(コミュニケーション)」の存在が必要だと指摘し、この 3 つの側面がとぎれることなくサイクルになることが重要だと述べている。そこで、本研究ではシニア劇団の活動および行政の支援状況を 3 つの側面から分析し、とりわけ「交流」の側面に焦点を当てて、浮かび上がる成果と課題を考察する。

<sup>3</sup> 片桐(2012)では、高齢者の社会参加を 3 つのフェーズに分けて分類しているが、最も社会参加度の高いフェーズの具体例としてはボランティア活動や自治会への参加が挙げられ、文化芸術活動は想定されない。

<sup>4</sup> 松本(2011)では、中川幾郎の自治体文化政策基本モデルを「中川モデル」と名付けている。筆者もこれに倣い、中川モデルと呼ぶこととする。なお、松本は地域ガバナンスの視点から中川モデルを再検討し、新たなモデルを提唱しているが、芸術創造拠点に対象を絞ったものであるため、本研究では中川モデルを分析枠組みとする。

## 第2章 シニア演劇と地域社会

### 2-1 研究題材の選定理由

本研究では高齢者の芸術活動のうち、シニア演劇の活動に焦点を当てる。筆者は演劇の持つ特徴が高齢者の地域参加を促すことに役立つのではないかと考えている。その特徴とはすなわち、未経験者による参加のしやすさと、演劇の持つ共同性である。

まず未経験者による参加のしやすさについては、まず演劇創作にかかる費用の低さがあげられる。演劇は他の芸術ジャンルに比べて、道具や材料にお金をかける必要がなく、身体ひとつで表現することが可能な芸術である。もちろん、舞台美術や音響・照明などの凝った作品をつくるとなれば、相応のお金が必要になるが、演出方法次第で低予算に抑えることが可能なため、年金で生活する高齢者も気軽に活動できる。自治体や地域の劇団が主宰する場合でも、稽古や公演場所の確保さえできれば、劇団設立にかかる費用は高くないため、今後も劇団数が増えていく可能性があるだろう。

また、演劇経験がない人でも参加しやすい点に演劇の特徴がある。高齢者が演劇に挑戦する場合、舞台上での激しい運動や長台詞の暗記が難しくなるなど、加齢に伴う身体機能・認知機能の衰えがもたらす制約は大きい。しかし、特別な技能を必要とせず、誰でも年齢に関係なく始めることができるのは演劇ならではのメリットである。例えば、市民楽団などと比較しても、楽団員の多くは経験者で構成され、新たに楽器を始めるという人は少ない(今井 2006、p.51)。アマチュア・オーケストラの実態を調査した鈴木木(2007)によれば、ある楽団の楽団員に対して音楽経験を訊ねたところ、弦楽器担当 16 名のうち、100%(16 名)が 12 歳までに何らかの音楽活動を開始しており、管・打楽器担当 16 名のうち、87.5%(14 名)が中学校で吹奏楽部に入部し、楽器演奏の経験を持っているという調査結果が示されている。アマチュア・オーケストラの活動が、青少年期に音楽経験を持った人々によって支えられていることを示唆している。

一方で、シニア演劇は演劇初心者が多いことにその特徴がある(朝日 2011、p.11)。例えば本研究で事例とする劇団「すずしろ」では、インタビューを行った 16 人中、高校・大学時代など若い頃から演劇に親しんでいたのは 6 人に留

まり、残り 10 人は中高年になってから初めて演劇を経験していた。入団するまで観劇経験すらほとんどなかったという人も少なくない。もちろん、音楽未経験者が楽団に入れないわけではなく、その点から音楽が高齢者に適さないと主張するつもりはない。しかし以上のデータは、高齢者が初めて演劇に挑戦しようとする際に、心理的な抵抗感が比較的小さいことを示すための傍証となるだろう。

演劇に注目した 2 つめの理由は、演劇の持つ共同性にある。例えば囲碁・将棋、俳句、写真など個人でも完結できる活動と違い、演劇は創作過程において他者とのコミュニケーションを取ることが求められる。仮にひとり芝居であっても、スタッフとの協力なしには公演は成立しない。近年、コミュニケーション教育の一環として演劇の要素を学校教育に取り入れる試みも増えているが<sup>5</sup>、演劇を通して社会性を身につけていくことができるという点で、閉じこもりがちな高齢者には適した芸術ジャンルである。

演劇の持つ共同性に注目した古賀(2015)は、「本来、人は社会のなかで人と関わりながら生きている。演劇に関わることで人との関係性を取り戻すことができる」と指摘し、ホームレスの就労自立支援に演劇が効果的であることを述べている。同研究はホームレスを対象に行ったものだが、社会的孤立が問題視される高齢者に対しても、同様の指摘ができよう。

高齢者をとりまく社会的な課題として、地域社会に溶け込めない人々が増えていることが挙げられる。その原因の多くは、高度経済成長に伴う就業のあり方が変化したことにある。団塊の世代の特徴であるサラリーマン化によって、地域のつながりが希薄化した可能性が指摘されるが(内閣府 2007、p.89)、特に男性にとっては、郊外に住居を構え、都市部へ通勤するという住職分離の生活が定着しており、地域住民との付き合いも薄く、居住地域は寝に帰る場所となることが多い。定年退職後にそれまで地域とのつながりをつくってこなかった高齢者が孤立することなく、どのように地域社会と関わりを持って生活するのが現代社会の課題となっている。このような社会状況に対して、劇団が高

<sup>5</sup> 文部科学省(2011)では、演劇的手法を活かしたワークショップの実践例が紹介されている。同資料によると、平成 23 年度「児童生徒のコミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験」開催校 83 校のうち、分野別の状況をみると 63 校(75.9%)が演劇分野であった。

齢者にとっての地域の居場所となり、地域社会とのつながりをつくるきっかけを与え得ると筆者は考えている。

以上の理由から、本研究では高齢者の演劇活動に焦点を絞ることとする。なお、上記の特性は舞踊についても当てはまるが、演劇に比べていまだ高齢者世代には普及していないと考え、本研究では対象から除外することとした。ただし、高齢者向けに舞踊のプログラムを実施する例もあるため、将来的に発展の可能性のあることを付記しておく<sup>6</sup>。

## 2-2 全国的な状況

本節では朝日恵子(2011,2015)を踏まえつつ、シニア演劇の現状と課題について、全国的な調査から明らかになったことを整理していく。

朝日(2011)では「シニア演劇」の定義を「中高年から演劇を始めた50～80代を中心に構成された演劇劇団・演劇講座」としている。しかし、朝日自身が補足しているように、シニア演劇のありようは、設立の経緯、活動目的、運営体制などが多様であるため、一括りに扱うことが非常に難しい。入団資格も、60歳以上とする劇団がある一方で、45歳以上と非常に幅広い年齢層から募集する劇団もある。共通している特徴は、朝日が定義しているように、「中高年から演劇を始めた」という点だけである。代表的な劇団としては、彩の国さいたま芸術劇場の芸術監督である蜷川幸雄が2006年に設立した「さいたまゴールド・シアター」が有名だが、それ以前から各地域でシニア演劇は生まれている。

2010年には、「第一回箕面国際シニア演劇フェスティバル」が開催され、全国規模のシニア演劇大会としては日本で初めての取り組みとされている(朝日 2011, p.16)。この大会は大阪府箕面市で活動するシニア劇団「すずしろ」が中心となって開かれたが、その後「第二回」は開催されていない。翌年の2011年に、今度はNPO法人シニア演劇ネットワーク代表の鯨エマが主導して、「全国シニア演劇大会」の第1回が東京都池袋で開催された。本大会は現在まで継

続しており、第3回となる「全国シニア演劇大会 in 仙台」は2015年6月に、同市及び公益財団法人仙台市民文化事業団との共催で実施された。全国から10劇団が参加し、交流を深めた<sup>7</sup>。

以上のように、近年シニア演劇に対する注目度は高まりつつあるが、実際に全国でどのくらいの劇団が存在するのか、具体的なデータが得られなかったため、全国的な調査を行い、実態把握を試みた。まず、全国にどのようなシニア劇団が存在するのか調べ、リストを作成した。調査方法としては、全国のシニア演劇の状況が掲載された「シニア演劇 web」「シニア演劇ネットワーク」などのwebサイトや、朝日新聞・読売新聞の新聞記事データベース検索を利用した。その後、それぞれの劇団のホームページなどから情報を集め、設立年、運営主体、活動地域、設立経緯、指導者の有無について表にまとめた<sup>8</sup>。その結果、2015年12月の時点で全国に63のシニア演劇団体・演劇講座が活動中であることが確認できた<sup>9</sup>。

設立年に関しては、大阪府八尾市の「八老劇団」が1973年で最も早かった。その後、徐々に設立数が増加するが、2006年前後から設立数が急増している<sup>10</sup>。63劇団中40劇団は2006年以降に設立された劇団である。考えられる原因は2つある。1つは、「団塊の世代」が一斉退職を迎える時期と重なっていることである。「団塊の世代」とは1947-49年の第1次ベビーブームに生まれた世代を指すが、彼らが一斉に60歳の定年退職を迎えるのが2007-09年である。「高齢者雇用安定法」の改正により定年の引き上げなどの雇用確保措置が行われたため、一斉退職は懸念されていたほど問題にならなかったが、仕事から解放され、余暇活動にお金と時間を費やす高齢者がこの時期に急増したといわれる(関沢 2004, p.255)。

原因の2つめには、2006年のさいたまゴールド・シアター設立が考えられる。同劇団員募集が公表された際の反響は大変大きく、世界的に著名な蜷川幸雄から直接指導を受

<sup>6</sup> ブリティッシュ・カウンシルが主催したシンポジウム「超高齢社会における芸術の役割」では英国の先進的な事例を紹介している。また、日本では近年、コミュニティダンスが盛んとなりつつあり、NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク主催のDance life festival2008では「高齢者と共に創るダンス in 札幌」「子どもから高齢者までが共に創るダンス in 岐阜・山県」を実施するなど、高齢者の持つ創造性を引き出す取り組みが各所で行われている。

<sup>7</sup> 筆者も3日間大会に参加し、シニア演劇の現状と課題について、可能な限り聞き取りを行った。

<sup>8</sup> 調査結果の一覧については表1を参照のこと。

<sup>9</sup> すでに解散した劇団は含めない。同じ主宰者が複数の劇団を運営する場合には、まとめて1劇団とした。インターネットで情報を発信していない劇団等を考慮すれば、劇団数はより多くなることが予想される。

<sup>10</sup> シニア劇団の設立年については図1を参照のこと。

けられるということも後押しして、募集枠 20 人に対して 1226 人もの応募者が集まった。応募者の中には海外からの応募も複数あったという(徳永 2013、p.22)。同劇団の公演作品は芸術性の高さも認められ、2009 年と 2014 年には東京で開催される国際的な舞台芸術祭「フェスティバル・トーキョー」から招聘を受けたほか、2013 年にはパリ、2014 年にはパリに加えて香港でも公演を行っている。テレビや雑誌など様々なメディアにも取り上げられたため、2006 年以降に設立されたシニア劇団のなかには、ゴールド・シアターの影響を受けたところも多いと考えられる。

指導者については 63 劇団中 40 劇団がプロの演劇人あるいは地域のアマチュア劇団などから演技指導を受けている。指導を受けない団体の多くは、演劇活動そのものではなく、高齢者施設でのボランティアを目的に活動しているところが多い。例えば、1975 年に静岡県藤枝市で生まれた劇団「ほのお」は、市の保健師と民生委員が協力して高齢化社会の課題をわかりやすく伝えることを目的に設立され、地元だけでなく東京や福岡でも公演依頼を受けている。劇団「ほのお」の他にも、高齢者や介護者を取りまく環境をテーマにしたり、介護認定制度の仕組みやオレオレ詐欺の手口などを寸劇によって分かりやすく伝えたりする劇団は多い。また、ボランティア活動として介護施設や学校などで訪問公演を行う劇団もある。演劇を手段とし、高齢化社会の問題を解決することを目的に活動する劇団の場合、自分たちで脚本づくりから稽古までをこなす傾向にあるのが特徴である。

一方、外部から演劇の指導者を呼ぶ場合には、社会的な課題解決が目的ではなく、演劇そのものを楽しむことを目的とする劇団が多くなる。高齢者自身が健康で、元気に生活できることを目標とする劇団の場合、高齢者が頑張っている姿を観客に見せることが重要である。作品の質を問われないことが多く、演技や作品が稚拙であっても、大きな拍手が送られることもある。しかし、2000 年前後から演劇作品としての完成度の高さを追求するタイプのシニア劇団が増え始めていると、朝日(2011)は指摘する。世界的な演出家が指導し、プロの世界でも評価を受けているさいたまゴールド・シアターがその典型例であるが、「学芸会の延長」では満足せず、よりよい演技を目指して自分を高めていけるような劇団を好む高齢者が増えてきているようだ。

次に、地域ごとの設立数をみていくと、北海道・東北地

方は 12 団体、関東地方は 18 団体、中部地方は 11 団体、近畿地方は 13 団体、中国・四国地方は 4 団体、九州・沖縄地方は 4 団体であった<sup>11</sup>。そのうち政令指定都市にある劇団は 19 団体、東京 23 区内(新宿区、板橋区、渋谷区、豊島区)が 8 団体、中核市が 6 団体である。約半数のシニア演劇が、人口の多い都市部に分布していることが浮かび上がった。わが国の高齢化状況について、『高齢社会白書 平成 27 年度版』では都市部での急速な高齢化が課題とされており、これからますます退職した高齢者が増加する。地域社会における高齢者の居場所づくりとして、今後もシニア劇団の存在意義は大きいと考える。

一方、過疎化や高齢化の進む地域でも精力的な活動を続けるシニア劇団は存在した。今回の調査で劇団の存在を確認できた市町村のうち、北海道浦河町、北海道釧路市、岩手県西和賀町、山形県川西町、島根県浜田市は過疎地域自立促進特別措置法第二条で定められた「過疎地域」に該当する市町である。このような地域でもシニア劇団が設立し、活躍している点を強調しておきたい。例えば、全国でも特に高齢化率の高い西和賀町では、近隣の同県北上市、秋田県横手市と共同で「シニア演劇講座事業」を実施しており、毎年、各市町から参加者を募集している。同様の課題を抱えた近隣の自治体同士が広域的に連携する取り組みは、他の地域でも参考になるだろう。

### 2-3 分類と事例選定

運営主体に注目して分類すると、大きく 3 つの劇団に分けることができた<sup>12</sup>。①市民主体の劇団は 34 団体 ②自治体・文化財団が運営する劇団は 7 団体 ③演劇人・劇団が運営する劇団は 22 団体だった。また、①の 34 団体のうち 15 団体は、劇団設立の際に自治体・文化財団が関与している<sup>13</sup>。運営主体によって活動の目的や内容に違いがみられた。

#### (1)市民主体の劇団

シニア世代の市民が自主的に設立する場合、高齢者の生きがいをづくりや、認知症予防、体力づくりなどを活動目的とする劇団や、社会問題をテーマにした寸劇を通じて普及・啓発活動などを目指す劇団が多い。公演場所は地域の公民館などだが、介護施設や学校・保育園などに訪問公演

<sup>11</sup> シニア劇団の活動地域については図 2 を参照のこと。

<sup>12</sup> 分類は、朝日(2011)を参考にした。

<sup>13</sup> 運営主体ごとの分類については図 3 を参照のこと。

する劇団もある。青森県おいらせ町の「劇団笑劇」(2004年設立)は、介護や相続問題をテーマにした時代劇風の作品を町内外で公演しており、2013年には日本公証人連合会から、公正証書遺言の紹介に尽力したとして感謝状を受け取っている。また、東京都八丈町の「劇団かぶつ」(2007年設立)は、「島言葉(八丈方言)」で脚本を書き、衣装に八丈島特産の「黄八丈」を利用するなど、地域文化の継承を目的に活動している。島根県浜田市の「石見国くにびき18座」は戦争の記憶を残すという明確な目的を持って活動を続ける。文化や歴史の継承を目指した高齢者ならではの取り組みが行われている。

また、設立に自治体・文化財団が関与している場合には、公民館や生涯学習センター主催の高齢者向け演劇講座をきっかけに設立された劇団が多く、講座終了後も演劇を続けたいと願う受講生が自主的に劇団をつくるパターンが一般的である。その場合、講座を担当した講師がそのまま劇団の指導者に就くことが多い。劇団の設立後も、施設利用の減免や広報活動などの支援を受ける例もある。

## (2)行政・文化財団が運営する劇団

行政・文化財団が主導して劇団を運営する場合、ほとんどが文化施設の自主事業として行われ、演劇の普及などを目的としている。毎年、市民から受講生を募集して、半年から1年程度の期間をかけて稽古から上演まで行う、期間限定の劇団であることが多い。

稽古場・公演場所の確保から指導者の依頼やスタッフの手配まで、運営に関する事務は基本的に施設側が行うため、参加者にとっては劇団運営の苦勞が少ない。加えて、事業予算が充てられ、公共施設を無料で利用できるため、参加費が低く抑えられるというメリットがある。ただし、この類型は非常に数が少ないため、行政・文化財団の関わり方は、劇団設立のきっかけづくりまでに留まり、その後の運営は団員の自主的な努力に任せることが多い。

## (3)演劇人・劇団が運営する劇団

シニア演劇のなかには、俳優や演出家などが個人で設立するもの、劇団の事業としてシニア向けの演劇教室を開設するもの、民間劇場が組織するものなどがある。前述した(1)、(2)の劇団と異なる特色は、対象年齢が低めに設定される傾向にあり、40代から募集する劇団も多いという点である。演劇関係者がシニア劇団を設立するねらいは3つ考えられる。1つには、演劇を社会に役立てようという社会貢献とし

ての試みである。演劇活動を通じて、高齢者に表現する喜びを知ってもらいたいという思いを目的として掲げる劇団が多い。2つには、芸術的側面である。素人の高齢者に俳優としての魅力を見出し、一緒に作品を作ってみたいという興味関心がある。3つには、シニア層をターゲットとした演劇普及活動である。演劇の楽しさを知ってもらうことで、自分たちの公演における観客の獲得や演劇活動への理解を広げる狙いがあると推察される。シニア層を取りこむことで、劇団活動の維持につながったケースもある。山形県川西町の「劇団菜の花座」は30代の団員が立て続けに退団・休団して困っていたところ、劇団内にシニア部門を設けたことで、団員の確保につながり、さらには集客にも効果があったという<sup>14</sup>。

## (4)事例の選定

本章ではシニア演劇についての概況を述べたが、地域や運営主体によって、活動の目的や内容は異なり、劇団のありようが非常に多様であることを改めて確認できた。過疎地域では地域文化の継承などに貢献しているし、都市部では高齢者が「第2の人生」を有意義に過ごすための受け皿となっている。劇団の地域分布をみれば偏りがあるものの、どのような地域でも劇団の設立が可能であることが分かる。今後も、それぞれの実情に合わせて多様なシニア演劇が生まれ、地域社会の課題解決に貢献することが期待される。

しかし、その際に問題となるのが、それぞれの活動目的に適った環境を整えることができるかどうかである。例えば、本格的な演劇に挑戦したければ、専門家を指導者として迎え、継続的に利用できる稽古場を確保することが望ましい。また、地域文化を発信したくても、適切な発表機会がなければ十分な成果を上げることができない。自分たちだけで準備することが難しければ、行政やNPOなど外部組織の支援が必要になることもある。活動内容だけでなく、どのように劇団を運営していくか、についても考える必要がある。

事例の選定基準は、まずシニア演劇の典型事例を対象とするため、最も数の多かった市民主体の劇団であることとした。加えて、自治体による支援のあり方を考察するため、自治体が劇団設立に関与している事例を選定する。

<sup>14</sup> 2015年6月6日、「菜の花プラザシニア団」団員へのインタビュー。日立システムズホール仙台 交流ホールにて。

さらに、本研究の目的は高齢者の芸術活動が地域社会において果たす役割を明らかにすることであるため、趣味的な性格の強い団体や、はじめからボランティア活動を目的とした団体を候補から除外する必要があった。前章で述べたように、近年の傾向として芸術志向の強い劇団が増加していることも考慮し、演劇人に演技指導を依頼していることと、定期的に対外的な公演を行っていることを選定基準とした。

以上の理由から絞り込みを行ったところ、7劇団が該当した<sup>15</sup>。そのうち、劇団「すずしろ」は、2004年の箕面市立中央生涯学習センターの市民企画講座「60歳からの演劇入門」をきっかけに設立した劇団で、自治体が劇団設立に関与している。また、プロ俳優の倉田操(1975年生まれ)を指導者に迎え、ニューヨーク公演やシニア演劇の全国大会開催など、他劇団と比較して際立った活動実績を残していることから、劇団「すずしろ」を研究対象に選んだ。同劇団の活動が発展していく背景には、演劇人の存在や行政との連携が重要な要素となっている。次章以降の事例研究を通じて、今後のシニア演劇のありようを考えるうえでの1つの成功モデルとして提示したい。

### 第3章 劇団「すずしろ」

本章および次章では市民の手で主体的に運営されている劇団「すずしろ」を事例として、シニア劇団が地域社会とどのような関わりを持っているのか、また劇団の活動を支える行政のありようについて、明らかになったことを整理し、考察していく。本章では、調査対象の劇団「すずしろ」と活動拠点である大阪府箕面市の概要について述べる。

#### 3-1 箕面市の概要

##### (1) 箕面市の概要

箕面市は大阪府北部(北摂地域)に位置する都市である。人口は2008年度以降、毎年1000人以上の増加を続け、現在13万5470人(2015年12月)となっている。面積は47.90

キロ平方メートルで、中部・北部は山間地であり、明治の森箕面国定公園や箕面大滝など古くから観光地として親しまれている名所がある。紅葉の季節には大勢の観光客が訪れる。南部には市街地・住宅地が広がり、大阪都市圏のベッドタウンとして発達してきた。箕面駅を起点に阪急電鉄箕面線が南北に走っているため、大阪都心部まで30分程度の距離である。都市開発も進んでおり、現市長になってから北大阪急行線延伸計画が進められている。

同市は近隣の吹田市、池田市、豊中市などと並んで大阪府内で最も市民の所得が高い地域でもある。内閣府が公表している納税義務者1人当たり課税対象所得のデータを参照すると、箕面市は408.1万円(2013年現在)で府内トップとなっており<sup>16</sup>、裕福な世帯の多い地域である。

同市の高齢者状況はどのようになっているのか<sup>17</sup>。まず65歳以上の高齢者人口の割合(高齢化率)は2013年度現在で22.4%となっており、全国平均の25.1%と比べても割合は低い。しかし、今後10年間で、団塊の世代がすべて後期高齢者となり、後期高齢者数は2015年に比べ50%以上増加する見込みとなっている。要支援・要介護認定者数は、2000年3月末から2014年3月末までの14年間で1324人から5318人へと301.7%増となり、高齢者医療事業費や介護給付費は増加傾向にあり、介護サービスの担い手不足や介護給付費・医療費の増加が今後の課題となっている。

以上の状況を鑑み、同市では高齢者の健康を維持・増進し、要支援・要介護認定者数を抑えるために、外出促進を図る取り組みを行っている。具体的には、「第6期箕面市高齢者福祉計画・介護保険事業計画」に記載している「高齢者が生きがいややりがいを持って活躍できる地域づくり」や「高齢者の学習機会の確保とスポーツを通じた健康づくりの機会の確保」、「高齢者の交流・活動の拠点の支援」などがある。

また、2015年6月には、関係部局の職員からなる「健康長寿推進・在宅保育支援プロジェクトチーム」を立ち上げ、高齢者が活躍できる場をつくるための新しい施策の検討を開始している。同プロジェクトでは、高齢者や在宅子育て

<sup>15</sup> 劇団「すずしろ」のほかに福岡市の高齢者市民劇団「シルバーパンサー」(2000年設立)、静岡市の劇団「あしたば」(2001年設立)、奈良県生駒市の「らくらく演劇塾」(2005年設立)、宮崎県延岡市のシニア劇団「のべおか笑銀座」(2006年設立)、仙台市のシニア劇団「満座楽」(2010年設立)、栃木県足利市の足利市民劇団「燦SAN」(2011年設立)が該当した。

<sup>16</sup> 内閣府「市区町村別 人口・経済データ 課税対象所得:総務省『市町村税課税状況等の調べ』(納税義務者数一人当たり)」を参照した。

<sup>17</sup> 箕面市における高齢者の状況については、『平成27年度版 市勢年鑑』および「第6期高齢者保健福祉計画・介護保険事業計画」を参照した。

世代への「情報提供の強化策」、「家に籠もることなく、まずは、家からでる仕掛けづくり」、「同世代・他世代・地域などにつながる仕掛けづくり」の施策の検討を行っている<sup>18</sup>。

## (2)文化芸術活動への支援状況

箕面市の文化施策は、市長部局の人権文化部文化国際室と、教育委員会事務局の子ども未来創造局文化国際室が行っている。組織としてはそれぞれ2つの部局にまたがっているが、職員は子ども未来創造局文化国際室が担っており、市長部局である人権文化部の文化国際室を兼任する形になっている。市として一定の方向性で文化施策を展開していくために、市長部局と教育委員会部局の兼務という体制で施策展開している。

箕面市は市民活動およびその支援が盛んな地域である<sup>19</sup>。市民の文化活動支援については、大乘弘照箕面芸術文化振興基金助成事業のほか、市内文化団体の周年記念行事がある場合などには共催事業として実施し、施設利用の減免と広報支援を行っている。

文化活動の拠点としては、箕面市メイプルホールと箕面市立市民会館(グリーンホール)がある。どちらも人権文化部生涯学習・市民活動室の所管となっており、公益財団法人箕面市メイプル文化財団が指定管理者に選ばれている。箕面市の文化施設は施設利用料が他地域に比べて安い点に特徴があり、アマチュアの文化芸術団体が利用しやすくなっている。他地域の文化団体が利用することや中学・高校吹奏楽部の大会会場となることも多い。

同財団は1989年箕面市立メイプルホールのオープンとともに設立された財団法人箕面市文化振興事業団を前身とする。箕面市は地理的に大阪市内へ容易にアクセスすることができるので、都心に行けば本格的な舞台芸術鑑賞が可能となる。設立から2年間は買取り公演を中心に事業を行っていたが、海外から著名な楽団や俳優を招聘しても集客が困難な状況だった。そのため、1991年から市民の創作活動を支援するように方針を改め、市民参加事業などに重点を置くようになった。現在の中心事業は市内のあらゆる文化団体が参加する「みのおレビュー」があり、市にゆかりのあるプロの芸術家が関わって、市内のアマチュア文化団体が成果を披露する場となっている。その他の特徴として、

生涯学習課の事業が同財団に委託されるようになっており、「箕面シニア塾」の事業を担当するようになるなど、文化財団に社会教育的な機能を持たせるようにシフトしている。

このように箕面市では買取り公演を縮小し、地域の文化芸術団体に対する支援を強化するよう方針を転換し、鑑賞機会の提供よりも、文化芸術活動への市民参加に重点を置いて事業を展開してきた。一方で、対外的な文化発信や地域経済波及をねらうなど、文化芸術を戦略的に用いた施策が行われているとは言い難い状況である。

## 3-2 劇団の設立と運営

前述のとおり、劇団「すずしろ」は2004年、生涯学習センターの市民企画講座「60歳からの演劇入門」をきっかけに設立した劇団である。講座の企画を持ち込んだ劇団代表の秋田啓子は、同市に隣接する池田市で児童劇団の運営に携わっていた。しかし、自身の病気を理由に「同世代の人たちとつながりたい」と思うようになり、市民企画として同講座の開催を考えた。指導者の倉田とは児童劇団からの付き合いであり、そのままシニア劇団も担当してほしいと依頼した。講座には定員20人のところ、キャンセル待ちが出るほど応募があった。はじめからシニア劇団の設立を目的とした講座であったため、同講座の終了時に設立を呼びかけ、受講生20人のうち16人がそのまま劇団員として活動することとなった。

調査を行った2015年9月の時点で、22人の団員が活動している。男女構成は男性6人、女性16人だが<sup>20</sup>、自身の病気や家族の介護などの理由から続けることができなくなる人も多く、団員の入れ替わりは激しい。平均年齢は68.1歳で、最高年齢は80歳である<sup>21</sup>。設立当初は団員のほとんどが箕面市民だったが、近年は他市から通う人も増えており、箕面市民は5人に留まる。次いで池田市が3人、大阪市・豊中市・豊能町が2人ずつ、茨木市・川西市が1人ずつである。演劇経験については、学生時代など若い頃に経験のある人が6人いる。6人中4人は劇団「すずしろ」入団前に他の劇団に所属していた。移籍した理由は、稽古に

<sup>18</sup> 筆者による同市への問い合わせに対する回答から。

<sup>19</sup> 石川(2011)では「市民参加」の定義を明言した「箕面市市民参加条例」(1997年制定)が、全国の先進事例として紹介されている。

<sup>20</sup> その後、2015年12月5日、6日に行われた第7回本公演を期に2名が退団したため、2015年12月現在では20人である。

<sup>21</sup> 調査を行った9月3日現在。調査の協力を得られた団員16人の資料を基にしている。以降のデータも同様にインタビュー調査に基づいている。団員プロフィールの一覧については表2にまとめた。

満足できなかったことや、遠くて通えなくなったことなどである。学歴は四大卒が8人、短大卒が4人、中卒・高卒が4人である。世帯別にみると、独居しているのが5人、夫婦2人暮らしは9人だった。その他、子どもと2人暮らし・2世帯家族が1人ずついた。職歴も学校教員、サラリーマン、専業主婦など様々である。

劇団「すずしろ」の運営は劇団員によって自主的に行われている。劇団「すずしろ」の会則によると、会計、書記、利用者協議会担当、ルート担当、音楽著作権協会担当などの役割分担がなされている<sup>22</sup>。また、「劇団の運営は劇団員全員の話し合いで行う」と明記されており、毎回の稽古でミーティングの時間が設けられている。筆者が稽古に参加した際には、次回公演をオリジナル台本に挑戦するか、以前公演した台本の再演とするかの話し合いをしており、全員が意見を述べてから多数決で決定していた。団員には主体的な参加が求められており、どちらでもいいという意見や分からないという意見は認められない様子だった。揉めることも多いようだが、みんなで納得するように話し合っただけという方針にこだわりがある。

劇団の資金繰りはどのようになっているのか。まず収入については月会費が1人5000円で、公演参加費は徴収しない。劇団員が支払う会費は他劇団と比べても低めに設定してある<sup>23</sup>。団員が25人いれば、年間収入は150万円になる。公演は2日間4ステージを基本としており、40万円程度のチケット収入を得ている。定期公演を市内のホールで行う場合は、十分な収入である。他の劇団の場合は、公演のために別途費用を徴収する劇団も多いが、劇団「すずしろ」では個人が負担する費用は月ごとの会費だけである。

その他の収入としては、資金調達として定期的にフリーマーケットにも参加しており、1回6、7万円程度の収入となる。さらに、テレビドラマやCMなどの出演料のうち50%（2015年からは30%）を劇団に納入する決まりになっている。サントリーのサプリメント「オメガエイド」のCM出演依頼を受けたときには比較的高額の出演料となったので、10周年記念公演を大阪市梅田のHEPHALLで行うための重

要な資金源となった。

続いて支出についてはどうか。まず、指導者(倉田)への謝礼は1度の稽古で1万5000円。公演前の臨時稽古では1万円となる。公演時には、普段の謝礼とは別に演出料10万円を支払っているため、年間で計算すると、100万円程度になる。稽古場については、生涯学習センターの利用者協議会に所属しているため、市内の公民館や市民ホールを半額で使用できる。そのため、半日利用で1040円と、低予算で稽古場を確保している。その他、台本の印刷やチラシづくりなど、細かい支出は多い。公演の際には団員が全員俳優として舞台に立つため、照明・音響・舞台機構などの裏方スタッフを外注する。そのため人件費として10万円程度の支出となる。依頼公演で受ける謝礼については、指導者やスタッフへの人件費に充てられるため、団員の交通費・食費は各自で負担している。

### 3-3 劇団の活動実績

#### (1)活動内容

普段の活動は週1日4時間程度、市内の公共施設を利用して演劇の基礎訓練を行っている。公演前には週2、3日に増え、公演に向けた本格的な稽古を行う。稽古の前半は体操や筋力トレーニング、ゲーム形式の訓練などに時間を使い、演劇に必要な基礎体力や柔軟性を身につける。後半は、台本を使った稽古で、実践的な訓練を行う。

準備体操の間、指導者は団員らと雑談を交わしながら「腰の調子はどうですか？」などと団員の体調に気を配り、個々に適切なアドバイスを与える。筆者が稽古に参加したときには、団員同士で「〇〇さん、最近来てないね」「孤独死ちゃう？」「こんど、様子見にいくわ」と会話が展開されており、互いに見守り合うような、団員同士のつながりの強さが垣間見られた。

本公演は年に1回、箕面市メイプルホール小ホールで行っている。観客の多くは団員の家族や知人であり、団員自らチケットを売っている。ただし、チケットノルマは課せられていない。公演は100席の会場が毎回満員になるほど盛況となる。毎年行われる本公演以外にも、外部から依頼があれば積極的に出向いて公演を行っている。これまでに、市内の生涯学習センター、貝塚市公民館、豊能町ユーベルホールなどで公演を重ねてきた。以前は神戸の寺院から公演の依頼を受けたこともある。

<sup>22</sup> 秋田から提供を受けた「劇団『すずしろ』会則」を参照した。

<sup>23</sup> 劇団「すずしろ」同様、プロの指導が受けられる劇団を挙げると、例えば「かんじゅく座」(東京)では週2日で1万5000円(70歳以上は1万3000円)。アトリエ劇研では入会費、月会費ともに6000円で、公演参加費は別途3万円必要になる。

また、公演依頼だけでなく、テレビや映画への出演依頼も多く寄せられるようになってきている。希望者は指導者の所属するタレント事務所(株式会社ルート)に登録することができ、事務所を通じて依頼を受ける仕組みになっている。直接、劇団に依頼が来ることもあり、過去には著名な映画監督や、京都大学の自主映画サークル、立命館大学映像学部の映画研究サークルなどから依頼を受けた。このほか、教育委員会からの依頼で防災キャンペーンのラジオ番組に協力して防災ドラマを作ったり、2015年4月からは箕面市のコミュニティFM「みのおエフェム」の番組を1枠担当したりするなど、演劇公演以外にも活動の広がりを見せている。

以上のような活躍の一方、趣味サークルとしての側面も保っており、団員同士の親交を深めることも大切にしている。稽古のあとは近所の喫茶店で劇団のことや近況について語り合う。また、休みの日には演劇・映画鑑賞へ出かけたり、春には花見、秋には紅葉狩りなど季節の行事を楽しんだりしている。上演台本に七福神が出てきたときには、七福神を祀る寺院をめぐるスタンプラリーに参加した。

## (2) ニューヨーク公演とシニア演劇フェスティバル

劇団「すずしろ」の特筆すべき実績としては2010年6月に実施したニューヨーク公演と「第一回箕面国際シニア演劇フェスティバル」開催の2つがある。

ニューヨーク公演は指導者の倉田操が発案し、2年間かけて実現のための人脈づくりや資金調達を行った。同劇団の活動を広く知ってもらいたいと考えた倉田は、テレビ番組制作会社に勤める友人に企画を持ち込んだところ、「お年寄りというだけでは番組としてパンチが弱い。嘘でも『目指せブロードウェイ』くらい言わないと」と助言を受けたところ、それなら本当に目指してみるのも面白いと考え、代表の秋田に提案した。

公演実現には様々な困難があったが、多くの人から支援を受けて乗り越えていった。倉田は現地のコーディネートを依頼できる人物を探し、米国のNPO法人 Theatre Arts Japan 職員である宮井太を偶然見つけた<sup>24</sup>。同法人の設立目的に共感した秋田が長文のメールを送ったところ、宮井は協力を快諾し、舞台監督として現地スタッフの取りまとめや滞在中のプランを作るなどのサポートを行った。英語で

<sup>24</sup> Theatre Arts Japan とは、日本の舞台作品を米国、カナダで紹介する団体である。

上演することが決まったときには、英語講師をチラシで募集し、8か月にわたり無償で英語のレッスンをつけてもらった。現地のチラシを見て、自らヘアメイクの担当を買って出た日本人女性も現れた。箕面市は同劇団を「箕面市特命大使」に任命し、市のロゴが入った日英両語の名刺を持たせるなど、市のPR役として劇団を送り出している。

助成金を受けることができず、旅費も大きな課題となったが、渡米前に同市主催で行った壮行会でカンパを募ったところ80万円もの金額が集まり、結果的に出費を抑えることができた。公演当日はビザの関係で入場料が取れなかったため、代わりとして劇場入り口に寄付箱を設置したが、やはり80万円近くが集まったため、慈善団体 Make-a-Wish Foundation に全額を寄付している。

続いて、もう1つの実績である「第一回箕面国際シニア演劇フェスティバル」について説明する。秋田はニューヨーク公演の宣伝も兼ねて、シニア演劇の全国大会を開催しようと試みた。しかし、大会の規模を考えると劇団だけで運営するのは難しいと判断し、市の協力を仰ぐことにした。秋田は市長の倉田哲郎に直接企画書を持って行ったところ、市長は企画の趣旨に賛同し、その場で協力することが決定した。同時期に東京でも全国大会開催の動きがあったため、市長としては東京に先んじて箕面で開催したいというねらいがあったという<sup>25</sup>。

同演劇祭は、ニューヨークから帰国後の2010年10月に開催された。全国から5劇団を招聘し<sup>26</sup>、シニア劇団同士の交流を深めた。各劇団代表者の会合が開かれ、「より多くのシニアが持続的に芸術活動できる環境づくり」について話し合われた(朝日2011、p.17)。運営は劇団「すずしろ」、箕面市、財団法人箕面市文化振興事業団の3者により発足した実行委員会によって行われた。役割分担としては、大会の事務局は財団が担当し、企画立案やメディアへの対応、各劇団との調整などは同劇団が行った。市職員は大ロスポンサーの獲得など資金調達の面からサポートした。

<sup>25</sup> 2015年7月16日、秋田啓子へのインタビュー。箕面市立市民会館 会議室にて。

<sup>26</sup> アトリエ劇研シニア劇団「水組」(京都市)、「らくらく演劇塾」(奈良県生駒市)、シニア劇団「のべおか笑銀座」(宮崎県延岡市)、高齢者演劇集団「チャレンジャー」(静岡県富士市)、高齢協劇団「エルダーキャッツ」(香川県高松市)の5劇団である。大会の名称に「国際」とあるように、海外からもシニア劇団を招聘する予定であったが、実現に至らなかった。

## 第4章 インタビュー調査

本章ではシニア演劇が地域社会とどのような関わりを持っているのか、また劇団の活動を支える行政のありようについての聞き取り調査内容を整理する。インタビュー対象者は劇団代表者の秋田啓子、指導者の倉田操、現役劇団員15名、行政側へのインタビュー対象者は、劇団設立に関わった生涯学習センター職員の杉山尚輝、箕面市メイプル文化財団現事務局長の一階広充、箕面市長の倉田哲郎である。

### 4-1 中心人物

#### (1) 劇団代表者

劇団「すずしろ」の活動を常に牽引しているのは、劇団を設立した代表者・秋田啓子である。秋田は1943年、大阪市内に生まれた。若い頃から外国に関心を持っていたため京都外国語大学で英語を学び、卒業後は大阪商船三井船舶に勤めた。客船の客室乗務員として世界中を回っていたが、結婚を理由に退職し、箕面市で暮らすことになる。もともと活動的な人物で、結婚・子育てをしながら特定の人としか接する機会がないことを窮屈に感じ、市が主催する女性の人権問題をテーマとする市民フォーラムに参加するようになる。その中で、ロール・プレイングという手法を知り<sup>27</sup>、演劇に関心を持つようになった。本格的な演劇活動に目覚めたのは、47歳のとき(1990年)で、第1回箕面市民文化祭「夏の夜の夢」(シェイクスピア原作)の主演を務めたのがきっかけだった。以後、1991年5月から1995年4月まで箕面市文化振興事業団の理事を務めるなど、様々な市民文化活動に参加している。

2002年からは池田市水月児童文化センターで児童劇団を運営していたが<sup>28</sup>、50代後半で体調を大きく崩してから、子どもの相手をするのが難しくなってきた。秋田はこのとき、自身が高齢者であることを強く自覚し、老いを肌身に感じるようになったという。そこで他の高齢者がどのように暮らしているのか興味を持ち、「同世代とつながりたい」と考えたことが、シニア劇団の設立につながった。秋田は「世の中、だいたい60歳までで区切られることが多い。60歳にならないと入れない劇団をつくらうと思った」と話し、

高齢者が中心になって活動できる場所を作りたいかったという当時の考えを語った。

はじめは、自分たちが楽しむ場所という意識で活動していたが、今では劇団に対する考えが変化している。その最も大きな転換点がニューヨーク公演であった。高齢者だけの劇団がニューヨークで公演をするということで、様々な新聞・テレビ・雑誌から取材を受け、壮行会で80万円ものカンパが集まるなど、地元からも注目されていた。様々な人から支援を受けたことに感動した秋田は「この人たちの思いを持っていかねばならないと思った」という。

始めはただ「面白そう」という理由でニューヨーク公演の企画を進めていたが、帰国してから劇団の活動意義を考えるようになった。秋田は「シニアにはシニアの社会的役割があって、ニューヨーク公演にはミッションがあったんだなと思った。これからの高齢化社会を生きていくための1つの事例になる。高齢社会の中でシニア劇団が活動していく意味を地方都市から発信していこうと思っている」と話している<sup>29</sup>。

劇団の活動は秋田のネットワークを通じて実現している側面が大きい。箕面市メイプル文化財団の一階広充は、劇団「すずしろ」と財団とのつながりは「秋田さんの個性でつながっている」状態だと話しているが、行政・財団などの交渉は基本的に秋田自身が行っており、そこで生まれる信頼関係から様々な支援を獲得したり、融通を利かせてもらっていたりすることもある。また、箕面国際シニア演劇フェスティバルの開催を市との共催で実施する際にも、秋田が個人的に箕面市長に企画を持ちかけて協力を取り付けた。「みのおエフエム」の番組を担当することになったのも、公演の宣伝をするためにたびたびラジオ局に出入りしているうちに、ディレクターと顔見知りになったことがきっかけとなった。

劇団内での秋田の存在感は大きく、劇団員への調査では「すぐく和を大事にしよう」と秋田さんが気遣っている<sup>30</sup>。「すずしろは独特のいい雰囲気を持っている。それは秋田さんが上手にしていると思う<sup>31</sup>」など入団のきっかけや活動

<sup>27</sup> 演劇的手法を使った学習方法のひとつ。

<sup>28</sup> 現在は児童劇団の運営には関わっていない。

<sup>29</sup> 2015年7月16日、秋田啓子へのインタビュー。箕面市立市民会館 会議室にて。

<sup>30</sup> 2015年9月8日、亀井真美へのインタビュー。箕面市立市民会館 ロビーにて。

<sup>31</sup> 2015年9月7日、山下洋子へのインタビュー。箕面市立市民会館 会議室にて。

を継続できている理由として秋田の魅力を挙げる団員も複数みられた。秋田を中心に団員が結束している側面を確認できた。

## (2)指導者

劇団「すずしろ」の演技指導を担当する倉田操(1975年生まれ)は、池田市出身のプロ俳優である。倉本聰が設立した俳優養成所「富良野塾」で本格的に演劇を学んだ。倉田は高校卒業後、2年半オーストラリアに留学しており、その間にヒップホップダンスを始めた。帰国後もダンスを続けようとタレント養成所に入ったが、授業で演技の奥深さを知り、それをきっかけに演劇の道を志すようになった。

秋田との出会いは、26歳で富良野塾を卒業して大阪に帰郷した時期に、秋田が運営に関わっていた児童劇団の指導者を引き受けたことがきっかけだった。その後、市民企画講座「60歳からの演劇入門」を企画した秋田に、シニア劇団の指導を頼まれることになる。当時は俳優として成功するために、仕事の多い東京へ活動拠点を移すつもりでいた。実際、劇団「すずしろ」の指導を頼まれたときにはすでに上京することを決めていたので1度は断ったが、「交通費を出すから是非引き受けてほしい」という秋田の要望に、大阪との縁を切らないでおくのもよいと考え直し、承諾した。

しばらくは月に1回大阪に帰りながら劇団「すずしろ」の指導をする生活が続いていたが、ニューヨーク公演への追い込みをかける際に、東京との往復が難しくなり、公演終了までのつもりで大阪に一時滞在していたが、終了後もそのまま大阪に拠点を移すことにした。

劇団設立のための演劇講座を担当した当時、倉田は28歳で、まだ役者としてもキャリアの浅い時期だった。そのため、演劇指導もまだ不慣れだったうえに、30歳以上の差がある高齢者に教えることに戸惑いも感じていたが、続けていくうちに、徐々にシニア演劇に興味を惹かれるようになった。倉田は素人の高齢者が持つ人間としての存在感など、芸術的な側面に魅力を感じているが、加えて、高齢者との関わりを持つこと自体にも関心を持っている。倉田は団員同士の会話を聞くなかで、自分の両親と同世代の高齢者がどのような気持ちでいるのか、理解するようになったという。また、高齢者と接することで社会勉強にもなる。倉田は「全然芝居に関係なくても、僕が『仕事って好きなことした方がいいと思います?』とかきくと、わあっと意見が出てくるわけですよ。生の色んな意見が聞ける。『戦争ってどう思

います?』とか稽古でふってみると、私らのときはこうやった、ああやったっていうのが聞ける。これは、僕にとってなかなかの財産」と語る<sup>32</sup>。

倉田は劇団「すずしろ」の活動が若い世代に与える影響に期待しており、「高齢者のパワーを20代の人にも見ってもらって、自分たちももっとできるはずだ、とがんばってもらえるようにする」ことが劇団「すずしろ」の目標の1つと考えている。ニューヨーク公演はもともと劇団の活動をもっとPRしたいという思いから実現したものであるし、帰国後には公演までの記録をまとめたドキュメンタリー映画「晴れ舞台はブロードウェイで!」を製作し、大阪と東京で上映するなど、積極的に劇団「すずしろ」の活動を発信している。

現在、倉田は俳優として舞台や映像の仕事が続いているものの、主な収入源は講師の仕事が中心になっている。劇団「すずしろ」での指導実績がプロの世界でも評価されるようになり、現在は俳優養成所やタレント事務所など、プロ俳優を目指す場でも講師を務めるようになっている。

倉田が劇団「すずしろ」から受ける謝金は年間で100万円程度になる。倉田によると、同様の劇団が3つあれば暮らしていけるのだという。東京で活動していたときは、多くの若手俳優と同様に、演劇と関係のないアルバイトもすることで生計を立てていたが、現在は演劇に関する仕事だけに専念している。「いまは役者の仕事は関西の方が少ないですけど、僕自身はやりたいことをやれている感じがする」と、現在の生活に充足感を得ている。

また、シニア劇団の設立支援を行う団体 Stick Theater(2014年設立)の立ち上げに関わり、月に1度開かれるワークショップを倉田が担当している。倉田は演劇人の立場から、シニア劇団を増やしていきたいと考えている。狙いの1つには、役者が働ける場所を増やしていくということがある、シニアをターゲットに演劇を普及していくことに期待を持っている。

## 4-2 行政側

市民主体の活動である劇団「すずしろ」を支える主体として、行政の存在は大きい。そこで、これまで行政がどのように劇団「すずしろ」の活動に関与してきたのかについて

<sup>32</sup> 2015年5月8日、倉田操へのインタビュー。箕面市内の喫茶店にて。

て、劇団「すずしろ」と関係の深い人物にインタビューを行った。以下にその内容を時系列でまとめる。

### (1)生涯学習センター職員

本章の第1節で述べた通り、劇団「すずしろ」は箕面市の社会教育事業である市民企画講座から生まれた。同講座は、生涯学習センターで実施してほしい講座を市民から募集し、その中から市職員が講座の目的や内容を吟味したうえで開催を決定する。当時、同講座を担当していた市職員・杉山尚輝は、「社会教育とは市民の学習を支援するところだが、社会的な課題を解決するものでなくてはならない。当時、退職した男性がどのように地域に溶け込むかということが課題になっていたので、企画の内容を認めた」と話しており<sup>33</sup>、高齢者が地域で活動する社会的な意義を同講座に見出していた。

同講座を実施するうえで、講師の決定や講座の内容はすべて秋田が独力でおこなったため、市職員として協力したのは広報だけだった。しかし、杉山としては劇団の設立までで支援を終えるのではなく、活躍の場を増やしたいと考えていたため、異動先である東生涯学習センターの事業や、自身が理事を務める公民館大会などで劇団「すずしろ」の公演機会をつくった。その公演で同劇団を知った他自治体の職員が、劇団に公演を依頼しており、これまで貝塚市、豊能町での公演が実現している。

また、杉山が依頼公演をする狙いは2つあった。1つは高齢者が真剣に取り組んでいる姿をモデルケースとして社会に発信することである。杉山は公演後に必ず劇団員と観客を交えたグループディスカッションを実施し、劇団「すずしろ」の活動を通じて、地域の人たちに自分たちの生活や今後の人生を考えてもらうことを意図していた。2つには、団員に自身の活動意義を自ら理解してもらうことである。杉山は自身の役割を「社会的な価値づけ」をすることだと考える。「一定の社会的評価を自分たちの中で見出してもらうために、我々職員が価値を見出していく必要がある。自分たちの活動が世の中に役に立っているということが、(団員たちにとって)生きがいのになる」と話している<sup>34</sup>。

### (2)文化財団職員

<sup>33</sup> 2015年8月11日、杉山尚輝へのインタビュー。箕面市内の喫茶店にて。

<sup>34</sup> 2015年8月11日、杉山尚輝へのインタビュー。箕面市内の喫茶店にて。

劇団「すずしろ」が生涯学習センターの市民企画講座から自立した段階で、杉山は別の部署へと異動になり、今度は財団法人箕面市文化振興事業団との協力体制が始まった。当時の財団理事長と秋田は、劇団「すずしろ」の設立以前から知り合いであった。財団としても地域で生まれた劇団なので、市内で公演を行ってほしいという思いもあり、当初から友好的な関係を築いていた。現在は一階広充が館長となっているが、その関係性を保ったまま引き継いでおり、同劇団と友好的な関係を築いている。

一階は公演前の劇団員から感じる熱量に感心しており、「廊下や共有スペースでも練習されていて、その熱さや熱心さはみんなも感じていると思う」と話している<sup>35</sup>。市民の文化活動を支援することが財団の主要な目的であるため、劇団「すずしろ」が活発に活動している様子が、他の利用者などに伝わることは望ましいことだという。

具体的な活動支援としては、施設利用時の料金減免制度(利用者協議会制度)や公演時の助成金制度などの金銭的な援助があるが、施設の優先利用制度などはなく、基本的には市内にある他の文化芸術団体と同等の扱いである。記念公演(設立5周年や10周年など)の場合には共催という形をとっており、会場の提供、チケットの販売、広報の支援を行う。財団の持つルートからチラシやポスターの配架、ホームページでの広報などを行うことがここでの主な役割である。また、劇団員を補充するための演劇ワークショップの開催についても財団との共催である。これは市からできた講座「60歳からの演劇入門」の延長として捉え、演劇のすそ野を広げる教育普及活動が目的でもあるため、財団の事業として支援している。

### (3)市長

劇団「すずしろ」が市に協力を求めたときには、窓口としては基本的に財団が対応することになるが、協力・支援を推進した背景には、箕面市長・倉田哲郎(劇団指導者の倉田操との混同を避けるため、以下、市長と表記する)が重要な役割を果たしている。

市長は1947年静岡県清水市に生まれ、東京大学法学部を卒業後、郵政省(現総務省)の職員になる。2003年から2006年まで大阪府箕面市役所に出向した経験があり、市役所時代には「箕面市集中改革プラン」策定、「行政評価・改革推

<sup>35</sup> 2015年8月1日、一階広充へのインタビュー。箕面市中央生涯学習センター 会議室にて。

進委員会」発足などの行政改革や「子ども部」「地域振興部」の創設などに尽力した。その後、任期満了となり総務省に戻るも、2008年3月に退官し、同年8月の箕面市長選挙に立候補した。市長に就任した当時は34歳で全国最年少市長だった。就任後は慢性的な財政赤字を立て直すなど、敏腕をふるっている。

市長が劇団「すずしろ」に興味を持つようになったのは、市長就任の翌年2009年3月に開催された財団法人箕面市文化振興事業団20周年事業の市民参加演劇に参加したことがきっかけだった。市長は「村長役」で特別出演し、劇団「すずしろ」の団員らと共に演じた。稽古のときから色々話をするので、懇意になったという。現在でも、都合がつけば定期公演を観に来ている。

ニューヨーク公演の際には、箕面市のPRを積極的に担ってもらうことを目的に「箕面市特命大使」を創設し、劇団「すずしろ」をその第1号に任命した。劇団員に日英両語の市ロゴマーク入り名刺を渡し、箕面市の広報役として劇団「すずしろ」を送り出した。壮行会も市と劇団「すずしろ」の共催で行っている。また、ニューヨーク公演と同時に企画した箕面市国際シニア演劇フェスティバルについても、秋田が直接市長に企画を持ちかけたところ、その場で開催を決定した。市として予算を付けない代わりに、実行委員会に市職員を送り出し、資金調達の面から運営のサポートを行った。市長は「税金を使うと、税金を使わないとできないイベントになってしまうし、やるのが義務になっていく。でも、職員を出すことは税金を使うことに違いはない。お金ではなくマンパワーを提供したのは自発性を潰さないため」と話している<sup>36</sup>。ちょうどそのころ、東京でもシニア演劇の全国大会を開催する動きがあり、それよりも先に箕面で開催したかったという狙いもあったようだ<sup>37</sup>。名称に「国際」を入れるように発案したのも市長である。

市長が劇団「すずしろ」を応援する理由は2つある。1つには他の高齢者に対する影響力を期待したものである。市長は「すずしろのような活動が頑張ってくれば、他の高齢者が勇気をもらえる。すずしろは希望の星みたいなものだから、潰れてしまっても困る。他の地域でも同様の活

動を始めようと思う高齢者が増えてくれれば嬉しい」と語っている<sup>38</sup>。劇団「すずしろ」の存在が他の高齢者にも刺激となり、地域の高齢者活動をリードしていく存在になることを期待している。

2つには、箕面市の広報役、いわゆるシティ・プロモーションとしての役割を期待したものである。劇団「すずしろ」はニューヨーク公演、シニア演劇フェスティバルの実施など意欲的な取り組みをしてきたこともあり、新聞やテレビなどのマスメディアで大きく取り上げられてきた。劇団「すずしろ」の対外的な発信力は大きく、箕面市の事業から生まれた劇団「すずしろ」の活動が有名になることは、市としても歓迎すべきことであった。「箕面市特命大使」の発案は市長によるものだが、市の知名度向上、イメージ向上などへの期待もあって、劇団「すずしろ」の活動を応援してきた側面もある。近隣自治体の文化施設などでも、「箕面にはすずしろさんがありますよね」と言われるほど、劇団「すずしろ」の存在は箕面の地名とともに知名度を増している。

#### 4-3 劇団員

劇団員へのインタビューでは、入団に至る経緯と活動を通じて変化したことの2点を中心に聞き取りを行った。劇団代表である秋田啓子へのインタビュー結果も含めた劇団員16名から得られたコメントを、内容ごとに整理していく。

##### (1)入団の動機

入団の動機としては、「生きがい・自己実現」（コメント数12）、「同世代との交流」（コメント数6）、「社会とのつながり」（コメント数4）、「健康への配慮」（コメント数4）の4つに分類することができた<sup>39</sup>。

第1に、最も多かったコメントとして、「これから何をしたらいいかわからない」、「自分の本当にやりたいことをしたい」など、仕事や子育てを終え、残りの人生で何か打ち込めるものはないか模索していたことが挙げられる。これを「生きがい・自己実現」として1つの類型とした<sup>40</sup>。

<sup>38</sup> 2015年8月11日、倉田哲郎へのインタビュー。箕面市役所本館 応接室にて。

<sup>39</sup> 入団の動機に関するコメントの一覧は表4を参照のこと。

<sup>40</sup> 「打ち込めるもの」に演劇を選んだのは消極的な理由が多い。本格的な演劇をやりたいと考えた人が5人いた一方で、特に演劇でなくてもよかったと答えた団員も少なくない。劇団「すずしろ」の公演やワークショップの広告を偶然見つけて、興味を持ったという人が半数の8人だった。

<sup>36</sup> 2015年8月11日、倉田哲郎へのインタビュー。箕面市役所本館 応接室にて。

<sup>37</sup> 2015年7月16日、秋田啓子へのインタビュー。箕面市立市民会館 会議室にて。

入団の動機について訊ねると、団員の多くは自己の人生を振り返る。団員の濱田夢子(71歳・女性)は「私らの時代って学校卒業したら、ちょっと花嫁修業して結婚してっていう世代で、みんなそうなんですわ。(中略)自分の人生の最後に、ほんとにやりたいことをやらないで、自分の人生満足かっていうたら、なんか違うなって。子どもたちも手を離れてるし、自分には時間があるわけですよ。いっぺん恥ずかしいけど、お芝居をやってみようと思って」と話した<sup>41</sup>。濱田のようにこれまでの人生でやり残したことや後悔などが動機となっているほかに、残りの人生が少ないことへの焦りも、生きがい探しの動機として挙げられた。

第2に、同世代とのつながりや交流の機会を求める気持ちが挙げられる。これを「同世代との交流」として分類した。そもそも劇団を設立した秋田の動機も前節で述べたように、「高齢者の人とつながりたい」というものだったが、同世代にこだわる理由には、若い世代と一緒に活動することのデメリットがある。他の劇団に所属していた濱田は若者と一緒に演劇をやることについて、「やっぱり若い人が良い役つくんですよ。さみしい思いをする。なんぼ頑張っても可能性はないやなって。ここのいいところは、若かろうが、年いってようが、先生が平等に経験が浅かろうが深かろうが役をくれはるから、頑張ろうって思えます」と話す<sup>42</sup>。その他、「若い人もいたらついていけるか不安」など、同世代だから気楽に安心して活動できるとコメントする団員もいた。

第3の分類は、「社会とのつながり」である。人とのつながりを求める点では、第2の「同世代との交流」にも似た動機だが、退職が特別な動機になっている点に注目し、異なる類型とした。会社勤めをしていた団員の吉田祥子(80歳・女性)は、退職後の自身の生活を考えたときに不安を感じたという。吉田は「いままでずっと外の仕事ばかりしていて。(退職した後)、家で何をしていたらいいかわからないんです。(中略)外に出ることを考えないと、私絶対だめだと思ったから」と振り返る<sup>43</sup>。吉田は再就職を考えていたが、60歳を過ぎて仕事を探するのは難しく、断念した。同様に、

退職により切られてしまった社会とのつながりを、もう一度つくろうとして劇団に辿り着いた団員は、吉田の他に3人いた。

第4の分類は「健康への配慮」である。「老化防止に役立つ」「身体を動かしたい」などを動機とするコメントがみられた。年齢を重ねて、運動する機会が少なくなることへの不安もあるが、背景には第3の分類でも指摘した社会とのつながりの喪失がある。総合商社に勤めていた川島兼一(66歳・男性)は退職してからしばらく、家に閉じこもりがちな生活をしてきたが、妻の勧めで入団に至った。川島は「やっぱり、男は稼がなくなると、用済みだなって自分を思うんですよ。(中略)年齢も年齢だし。そういう精神的なものもあって、高血圧になって、心臓がドキドキするようになった」と、入団の動機に健康不順があったと語った<sup>44</sup>。

また、上記の分類に当てはまらない「その他」のコメントとして、自宅から近いことと、他のお稽古事と比べて費用がかからないことが入団の決め手になった団員が複数いた。特に、他の劇団に所属していた人に共通していたのは、遠くて通うことが難しくなり、地元で探したところ劇団「すずしろ」を偶然見つけたというものだった。

## (2)活動を通じて生まれた変化

次に、活動を通じて生まれた変化について、コメントを整理していく。団員たちが活動を継続していく中でどのような変化がみられたのかについて、聞き取った内容を整理した。ここでは「内面的変化」(コメント数12)、「同質的な集団での交流」(コメント数9)、「社会参加への萌芽」(コメント数10)、「健康増進」(コメント数10)の4つに分類できた<sup>45</sup>。

第1の分類とする「内面的変化」では、入団動機と同様に、生きがいづくりや自己実現の達成を挙げる人が12人と最も多かった。「ハリのある生活ができるようになった」「この年になっても自分を磨いて成長できるというのが嬉しい」などのコメントがみられた。入団8年目でベテランの大野雅子(67歳・女性)は、「いままで仕事以外に、ひとつのことに集中することがあまりなかったので、それがかえって私自身を生き返らせてくれているという感じがします。(中略)

<sup>41</sup> 2015年9月11日、濱田夢子へのインタビュー。箕面市立市民会館 ロビーにて。

<sup>42</sup> 2015年9月11日、濱田夢子へのインタビュー。箕面市立市民会館 ロビーにて。

<sup>43</sup> 2015年9月7日、吉田祥子へのインタビュー。箕面文化・交流センター ミーティングルームにて。

<sup>44</sup> 2015年9月4日、川島兼一へのインタビュー。箕面市立市民会館 会議室にて。

<sup>45</sup> 活動を通じて生まれた変化に関するコメントの一覧については表5を参照のこと。

シニアになってからでも、何かに打ち込める時間が持てるということは、すずしろのおかげ」と話す<sup>46</sup>。また、元中学校音楽教師の亀井真美(63歳・女性)は、「今日はめちゃくちゃ下手やったわあって落ち込んで、逆にほめられたときは帰りの車を運転しながらウフフって(喜んで)、そういう気分の変化も刺激があって面白い。カレンダーにすずしろ、すずしろ…って書いていて、これが生活のリズムになっている」とメリハリのある生活について語った<sup>47</sup>。

認められること、注目されることに喜びを感じる団員も複数いた。濱田は「認めてもらう。自分の存在を。私さびしく思うのはね、年いってくと、認めてもらうことが少なくなるんですよ。社会的に。高齢者はもういいわ、若い人に任せましょって。高齢者の立場って認めてもらえないってというのが、すごくさびしいんですよ」と話した<sup>48</sup>。同様のコメントは濱田の他に4件あった。

劇団に入って年齢を重ねることを肯定的に捉えられるようになったという声もある。劇団の中でも「若手」である和田準子(61歳・女性)は入団して新たな目標ができたという。「どっちかっていうと歳とともに衰えていくというのが一般的な姿かなって思うんですけど、ここは歳と共に、もうちょっと上もうちょっと上、あの人に近づこうというのがあって。(中略)だから、10年後の自分というのが、マイナスじゃなくてプラスに捉えられる」と、老いに対するイメージの変化を語った<sup>49</sup>。

第2の分類は「同質的集団での交流」である。6人の劇団員が、劇団「すずしろ」に入って最も良かった点として「つながり」や「居場所」ができたことを挙げた。和田準子は「私は5年おきくらいに居場所が変わったので、長いお付き合いの主婦友だちがいなかった。日本中にお友達はいるんですけど、日常で会える距離じゃない。そういう意味ではこのつながりは有難いなって思います」と話した<sup>50</sup>。

さらに、和田は他の習い事との違いについて「ただ単におしゃべりじゃなくて、目的が1つというのが、良い感じだなと思います」と指摘する。他の団員も「普通の習い事より一段深くつきあえる」「真剣な話し合いがある」など、集団の質について言及する団員も多かった。

同質的集団として、家族・友人など親しい間柄についてのコメントもみられた。公演をきっかけに家族が集まったり、古い友人と再会できたりすることに、活動の喜びを見出す人も多い。特に、普段会う機会の少ない子や孫も、公演があればわざわざ会いに来る。一人暮らしをしている小田秀子(64歳・女性)は「家族が来ることは、私にとっての大きなイベントですね。私のことが話題になってみんなで盛り上がるというのは、なかなか嬉しい」と熱っぽく語った<sup>51</sup>。

第3の分類は、「社会参加への萌芽」である。前述のとおり、代表の秋田はニューヨーク公演を経て、シニア演劇には社会的役割があると考えようになったと話しているが、同様に、演劇を社会のために役立てようという意識を持っているコメントをした団員は他に7人いた<sup>52</sup>。劇団の内部や家族・友人など親密な関係性の中での交流ではなく、劇団外部との接点に対して意識が向けられている点に注目し、第2の「同質的交流」と異なる類型とした。

例えば、入団3年目の糀葛美(72歳・女性)は、劇団「すずしろ」が高齢化社会について地域で考える場になるのではないかと考えている。糀はシニア演劇に期待する役割について、「芝居って観れますから。観て、面白さの中で、自分で考えるっていう。私も脚本みてよく考えるようになったんです。(中略)病気だったりとか、虐待だったりとか、こういうことがあるんだよっていう提案を社会にしていけるのって、芝居なのかもしれない」と語る<sup>53</sup>。糀自身もまた、年の離れた姉が老人ホームに入所しており、介護の問題や高齢化社会の問題について、脚本を通じて深く考えるようになったという。

<sup>46</sup> 2015年9月11日、大野雅子へのインタビュー。箕面市立市民会館 会議室にて。

<sup>47</sup> 2015年9月8日、亀井真美へのインタビュー。箕面市立市民会館 ロビーにて。

<sup>48</sup> 2015年9月11日、濱田夢子へのインタビュー。箕面市立市民会館 ロビーにて。

<sup>49</sup> 2015年9月8日、和田準子へのインタビュー。箕面市立市民会館 ロビーにて。

<sup>50</sup> 劇団「すずしろ」では、自身の健康や家庭の事情などやむを得ない理由から辞めていく者が多いが、退団後も公演を観に来たり、手伝いをしたりとつながりは大事にしている。筆者が稽古に参加し

たときには、1期生の男性が訪問し、旧交を温めていた。

<sup>51</sup> 2015年9月8日、小田秀子へのインタビュー。箕面市立市民会館 ロビーにて。

<sup>52</sup> このような意識には個人差があり、地域とのつながりをほとんど感じないとするコメントも3件あった。入団6年目の豊田旭はテレビや映画への出演にも積極的だったが、一度体調を崩してから体力も衰え、現在は劇団内の活動以外を控えている。

<sup>53</sup> 2015年9月14日、糀葛美へのインタビュー。箕面文化・交流センター ミーティングルームにて。

また、劇団「すずしろ」の活動は高齢者の生き方を考えさせるものだと考える団員もいる。濱田は「年いってくると、あれもできないこれもできないで、できないことばかりになるんですけど、やればできるんやっていうのをあたしたちは示しているんじゃないかな」と話すが、他の高齢者に対する影響を意識するコメントが複数みられた。「若い人たちのように盛り上がっているのは、周りにも勇気を与える。是非こういうようなのをみんなに見せてあげたい感じがする。公演だけでは伝わらないと思う」と、地域に向けて公演以外の形で活動を展開させたいと考える団員もいた<sup>54</sup>。

実際に、劇団「すずしろ」を足がかりにして、外部へと活動を展開させている団員も多くみられた。具体的には、倉田の所属するタレント事務所「ルート」を通じたテレビCM、ドラマ、映画などへの出演、立命館大学映像学部や京都大学の映画研究サークルなど学生映画への出演、コミュニティFM「みのおエフエム」での活動が中心である。なかには個人的に人脈を広げ、活動につなげている団員もいる。外部の演劇ワークショップに参加して、演劇・映画業界の若者と知り合い、そのつながりから学生の卒業制作映画などに出演するようになった団員もいる<sup>55</sup>。

川島兼一は退職してから家に閉じこもりがちな生活を送っていたが、劇団に入ってから変化があった。川島は入団してから脚本を書くようになり、「みのおエフエム」で劇団が担当する番組「すずしろアワー」で放送するためのラジオドラマを執筆するまでになった。同番組で川島は音楽番組のパーソナリティにもなっている。最近では、学生時代に熱中していた俳句を再開し、月に2度句会のために横浜まで出かけるようになるなど活動的になった。川島は「自分が生き生きなれた。それで、しんどいのには台本書いたりとかね。年寄りってさ、期待されなくなるのよ。なんにも。あんた生きてたらいいわって。(中略)ぼくがしたこと、みんなが喜んでくれるとかね、そういうことがものすごく嬉しい」と話す<sup>56</sup>。

第4の「健康増進」についてコメントしたのは10人だっ

<sup>54</sup> 2015年9月8日、小田秀子へのインタビュー。箕面市立市民会館 ロビーにて。

<sup>55</sup> 2015年9月7日、吉田祥子へのインタビュー。箕面文化・交流センター ミーティングルームにて。

<sup>56</sup> 2015年9月4日、川島兼一へのインタビュー。箕面市立市民会館 ロビーにて。

た。「演劇のために体力をつける必要がある」「稽古を休むわけにはいかないの、健康に気を遣う」など、演劇活動を継続するために健康を気遣っている団員が多くみられた。塚原幸明(70歳・男性)は「電車に乗るときも歩ける距離は歩くとか。1駅少なくして歩くとか。そういうのは心がけてますね。丈夫にしたい。演劇ってハードですよ。特に公演近くなったら、体力ないと難しいでしょ」と話したが<sup>57</sup>、同様に日常生活のなかにトレーニングの時間を自主的に設けている人は多かった。実際に首や腰の症状が軽くなったと話す団員もいる。

また健康面は必ずしも肉体的なものだけでなく、精神的な部分でも効果を実感している団員は少なくない。若い頃からアマチュア劇団の経験を持つ豊田旭(68歳・男性)は、「余計わびしくなりますよ。何もなかったら。身体も悪くなって。年取ってくると萎えてくるねん。だから自分で一生懸命奮い立てていくようなことが内面的にないと」と話す<sup>58</sup>、第1の分類である「生きがい・自己実現」とも関連して、劇団が精神的な部分の支えになっていると答えた団員は複数いた。

その他の効果としては、演劇作品や専門家に対する理解、社会教育研究でしばしば指摘される自己・他者理解の深まり<sup>59</sup>、行政との協働意識の芽生え<sup>60</sup>など、様々な学びの場になっていると答えた団員が9人いた。特に演劇への理解としては「テレビドラマを観ても勉強になる」「筋書きだけでなく、細かいところも注目するようになった」「舞台をつくるために色々なプロフェッショナルがあることに気づいた」などのコメントがみられ、教育普及活動としての側面が確認できる。

<sup>57</sup> 2015年9月14日、塚原幸明へのインタビュー。箕面文化・交流センター ミーティングルームにて。

<sup>58</sup> 2015年9月14日、豊田旭へのインタビュー。箕面文化・交流センター フリースペースにて。

<sup>59</sup> 小財順子は「役を通して改めて自分を見つめなおすこと」ができたと話す。2015年9月7日、小財順子へのインタビュー。箕面文化・交流センター ミーティングルームにて。

<sup>60</sup> 長谷川明子は、秋田が行政職員などとやりとりする姿をみて、「役所が遠い存在だったが、少し近く感じるようになった。市民と役所とがつながっているといいと思う」とコメントした。2015年9月8日、長谷川明子へのインタビュー。箕面市立市民会館 ロビーにて。

## 第5章 「中川モデル」による分析

前章では劇団員の地域との関わりや行政の支援状況について述べ、演劇を通じて高齢者が地域との関わりを持ち始めたことや市長をはじめとする行政側の支援が劇団の発展のために重要な役割を担っていたことを確認した。以上を踏まえて、本章では事例の分析を行う。劇団「すずしろ」の活動と行政支援の状況を客観的に把握し、今後の目指すべき方向性を模索したい。

本章では中川モデルを利用する。中川は市民文化の活性化のためには、「蓄積」「交流」「表現」の3つの側面がサイクルとなることが肝要だと述べている(中川 2001、p.31)。シニア劇団の活動実績、および行政による支援状況を3つの視点からそれぞれ考察し、成果と課題を明らかにしたい<sup>61</sup>。

### 5-1 「蓄積」

#### (1)劇団の分析

中川モデルでは「蓄積」を学習・研究・ストックなどと言い換えている。劇団「すずしろ」の活動を「蓄積」の側面から整理すると、日常的な稽古の積み重ねによる劇団員の演技技術の向上が第1に挙げられる。劇団「すずしろ」の活動目的はボランティアやお茶会などではなく、演劇活動であった。素人から演劇を始めた高齢者が多いとはいえ、プロ俳優の指導によって、普段から本格的に演技の訓練を行っているため、映画やテレビドラマに出演できるほど、団員たちの演技技術は確実に向上している。

個々の団員の意識は非常に高い。日々の生活のなかに自主稽古の時間をつくっており、勉強のために演劇・映画鑑賞を行うほど熱心である。2013年には市民企画講座を利用して脚本づくりの講座を企画・実施し、シニア世代の抱える問題や日常の会話などを脚本に反映させたオリジナル脚本にも挑戦した。劇団員の川島兼一は入団してから脚本を書き始め、今では「みのおエフエム」でラジオドラマを書くほど能力を向上させている。日々、衰えていくことを感じる高齢者にとって、新しい技能を習得し、自己の能力を向上させることができる場は貴重である。劇団員のインタビューからは、無力感を覚えていた高齢者が生きがいを見つけ、生きる活力を取り戻している様子が浮かび上がった。

<sup>61</sup> 分析のまとめについては表6を参照のこと。

「蓄積」の側面から注目すべき存在は、指導者の倉田操である。劇団が高齢者の暇つぶしやレクリエーションではなく、地域の芸術文化団体として活動を展開できている背景には、倉田による本格的な指導がある。倉田は難しい課題も出すので、家で練習してから稽古に臨む団員や、テレビを観ているときも、勉強するつもりで観るという団員もいる。団員のインタビューでも倉田の魅力を語るコメントが多くみられるが、とりわけ他の劇団を辞めて劇団「すずしろ」に移った団員は、倉田の本格的な指導と充実した稽古時間が入団の決め手となっている。ワークショップで倉田の指導に感銘を受けたという団員が多いことから、向上心の高い人にとっては、質の高い指導を受けられるかどうかは劇団選びのポイントになっていることが分かる。シニアだからといって妥協を許さない倉田の指導方針が、意欲の高い劇団員を引き寄せ、様々な活動へと発展しているのである。

#### (2)行政側の分析

市民文化の「蓄積」とは、地域の文化活動を担う人材を市民の中から発掘・確保することであると考えられるが、今回の調査からシニア劇団の活動を支援することが文化的なストック形成につながっていることが指摘できる。具体的な支援の方法は、劇団の設立支援と稽古場の減免制度が挙げられる。

まず劇団の設立支援に関しては、劇団「すずしろ」は生涯学習センターの事業である市民企画講座から生まれ、劇団員が主体的に様々なつながりを生んでいる点が興味深い。劇団をつくりたいという市民の思いを実現させ、さらに自立して活動できるような支援をしていくことは、地域の文化活動団体の育成という点で重要な施策である。

施設利用の減免制度も重要な支援の1つであった。第3章で述べた通り、箕面市のホールは他市と比べても利用料が低い。さらに、利用者協議会の制度によって、規定よりも半額で利用できる制度が適用されるため、非常に少ない金額で稽古場・公演の会場確保ができる。稽古については年間で約5万円、公演時には約6万円の負担軽減となっている<sup>62</sup>。普段の稽古はもちろんのこと、公演時に利用するホ

<sup>62</sup> ホールの料金設定は、「市内一般」「市内営利」「市外一般」「市外営利」に分かれている。利用者協議会に所属すると、これらの料金がさらに半額となる。劇団「すずしろ」は「市内一般」の枠で利用しているが、「市外営利」と比べると6倍の差がある。

ールは比較的高額になるため、劇団の維持・運営に貢献している。

設立には行政職員の活躍が重要だった。キーパーソンは、当時生涯学習センター職員だった杉山尚輝である。高齢者だけの劇団をつくりたいという秋田の構想を実現するうえで、市民企画講座「60歳からの演劇入門」はメンバー集めの点で役割を果たした。しかし、同講座は劇団設立の「きっかけ」をつくったに過ぎない。杉山の指摘するように、同講座は生涯学習センターの事業であるため、目的は劇団設立ではなく、高齢者に演劇を通じて地域社会との接点を持ってもらうことであった。したがって、講座の終了後も行政として関わりをもち続けることができたのは、杉山の個人的な判断によるものである。

## 5-2 「表現」

### (1) 劇団の分析

中川モデルでは「表現」を発表、発信、パフォーマンスなどと言い換えている。劇団の活動においては、作品の発表・パフォーマンスが活動の中心となる。劇団「すずしろ」のこれまでの10年間を振り返ると、精力的に公演活動が展開されてきたことが分かる<sup>63</sup>。過去の演劇公演回数は、年に1度の本公演に加えて依頼公演も合わせると18回になり、公演ペースは年に約2回である。基本的には市内のメイプルホールで行っているが、アマチュア劇団にもかかわらず、100席の小ホールが毎回満席になるのはホール職員の一階も高く評価している。2014年の10周年記念公演では倉田による提案で、大阪市梅田のHEPHALLでの公演に挑戦し、741人もの集客を達成した。2009年の第3回本公演では約82%が団員の家族・友人で占められ、その他の観客は約18%だったが、2014年は10周年記念として大阪市梅田で公演したこともあり、家族・友人以外の観客が約28%となった。徐々に外部の観客も増えてきている。

中川は「表現」を発信とも言い換えている。劇団「すずしろ」の活動を考えると、様々な活動が発信に役立っている。まず、公演を通じて中高年に与える影響が指摘できる。50代の観客からは「実父母、義父母の介護のまっただ中におり、若かった頃の姿、老いていく姿が、親のそれとダブリました。又、自分の老いについても、考えさせられるも

のがありました。(中略)誰にでも訪れる老いを、家族や友人と一緒に明るく迎えられればとつくづく思いました」などと共感を得ており<sup>64</sup>、市長が期待する「同世代に影響を与える存在」になっている。

また、ニューヨーク公演やシニア演劇大会の実施も発信活動として大きな効果があった。この2つの取り組みはメディアにも注目されることとなり、劇団「すずしろ」の活動が地元や近隣自治体で知られるようになった。テレビや新聞記事をみて同劇団を知り、興味を持った団員も複数いる<sup>65</sup>。加えて、市長が期待していたように、劇団の活動が有名になることは、劇団だけでなく箕面市の発信にも貢献する。

2014年4月から始まった「みのおエフエム」の番組「すずしろアワー」も劇団の発信活動に含まれる。番組ではラジオドラマの創作・発表にも挑戦するほか、団員の特技を活かした番組づくりをしている。例えば、幼少期から洋楽の好きだった女性は同じく音楽好きの男性とペアを組んで音楽番組を流しているし、海外旅行が趣味の女性は、ゲストと旅の思い出を語り合う番組を担当している。多彩な趣味を持つ団員たちが、自身のこれまでの人生経験を活かして、文化の発信に貢献している。

団員のインタビューからは、これまでの人生を振り返り、就職や結婚などを理由に「本当にやりたいこと」ができなかったと感じていた人が多かった。日々の生活に追われ、自分を表現することと無縁の生活を送ってきたシニアにとって、劇団「すずしろ」が第二の人生を歩むための自己実現の場となっていることがわかる。表現の機会を獲得できたことにやりがいや喜びを感じている団員は非常に多い。

### (2) 行政側の分析

「表現」の支援には、発表機会の提供がある。具体的には、会場を確保するための減免措置を行っている。アマチュアの劇団にとっては稽古場の確保以上に、公演のためにホールを借りることは大きな出費となり、資金繰りに苦労するので、行政ができる重要な支援策である。また、劇団設立の周年記念公演は共催で実施することとし、広報支援や会場の無償提供を行っている。

ただし、以上の支援制度は他の自治体に比べても特徴はなく、一般的な支援のあり方である。劇団「すずしろ」も

<sup>63</sup> 劇団「すずしろ」の活動実績については表3を参照のこと。

<sup>64</sup> 観客アンケートからの抜粋。伊丹市・50代男性のコメント。

<sup>65</sup> 小田、塚原、長谷川へのインタビューから。

他のアマチュア文化芸術団体とも同等の扱いを受けている。しかし、劇団「すずしろ」と行政の関わりを見ると、個人として同劇団を支援しようとする人材がいた。市職員の杉山尚輝と、市長の倉田哲郎である。

自治体において、市民に表現・発表の機会を提供することは文化振興施策の基本であるが、今回の事例では、杉山が個人的に劇団の活動意義を見出し、自身の立場を活かして公演の機会を積極的に増やした。9回ある依頼公演はほとんど杉山が関わって成立したものである。杉山自身が依頼したのが3回、後任の職員が依頼したのが1回、また、公民館大会から依頼公演に発展したのが3回あった。結果として、杉山の企画した公民館大会での公演が呼び水となり、他の地域にも公演の場が広がった。特に外部からの公演依頼は団員にとっても励みになるため、意義の大きいものだった。

次に、劇団「すずしろ」の活動に理解を示し、積極的に支援を行った市長である。シニア演劇フェスティバルでは、秋田から直接企画を提案された市長が市の事業として予算を割かない代わりに、市の職員を実行委員会として派遣するなどマンパワーで協力をしたことは興味深い。市長としては、「自主的な活動に予算をつけると、活動が市に依存したのになってしまう」と考えていた<sup>66</sup>。同劇団の活動が単なる高齢者の余暇活動として見なされれば、行政としても支援しづらい。しかし、活動を支援することが箕面市の文化発信に役立つ点に注目した市長の英断によって、支援が実現したのである。結果的に、劇団「すずしろ」を通じた市の広報に結びついた。

### 5-3 「交流」

#### (1) 劇団の分析

中川は「交流」を「コミュニケーション」とも言い換えているが、シニア劇団の場合は、劇団そのものが高齢者にとって他者とのコミュニケーションの場となっている。閉じこもりが問題視される高齢者にとって、劇団への所属を通じて同世代の仲間を見つけ、人とのつながりを持つことは、高齢者の社会参加を考えるうえで、非常に重要である。団員のインタビューでも、真剣な話し合いや切磋琢磨する環境に魅力を感じ、普通の友人関係とは異なるつながりを

団員同士で感じていることが分かった。ミーティングでは活発な意見交換がなされ、互いの演技に対しても指摘し合う。秋田は団員仲間を「同じ板の上に乗った人でしか信頼し得ない、同志」のような存在だと話す<sup>67</sup>。団員へのインタビューからも、若い世代と一緒に活動することへの不安や疎外感があり、同世代とのつながることが精神的な支えになることが分かった。

しかし、中川は「交流」の具体例として「多世代、異業種、職種間の市民交流の推進」「市民、団体の文化ネットワークの形成」などを挙げており、異分野同士のつながりを想定している。この視点から劇団の活動をみると、交流が劇団内に留まっており、劇団外の人たちとつながりを持つとする動きはあまりみられなかった。

個人レベルに視点を絞れば、劇団を足がかりにラジオ番組のパーソナリティを担当したり、学生映画に出演したりするなど、劇団外の活動に参加するようになっていることが分かった。自分たちより若い世代と知り合うなど、劇団外での交流の輪が広がっている点も重要である。劇団員へのインタビューを振り返ると、入団動機として「社会とのつながり」を挙げたのが4人だったのに対し、劇団の活動を通じて地域社会への関わりを持った人、または演劇を通じた社会貢献に関心を持った人が10人に増加したことは注目に値する。「生きがい・自己実現」「同世代との交流」など内向的な理由から演劇を始める人が多かったが、劇団で活動を継続していくうちに、演劇を通じた社会貢献や新たなネットワークを作ることに関心を持つようになり、劇団の外部へと意識が向けられるようになっていることが今回の調査で確認できた。

しかし、劇団レベルの活動としてみれば、他団体との交流活動はあまり進んでいるとは言い難く、基本的には、表現・発信に留まっている。指導者の倉田は劇団の活動が若者に与える影響は大きいと期待しているため、ニューヨークや若者の街・梅田での公演を提案したり、渡米までの記録映画を製作したりと、積極的に劇団「すずしろ」の活動を外部に発信しようと試みるが、団員のインタビューでは公演以外で地域とつながりを持つことはないコメントする団員も複数みられ、活動を通じて外部とのつながりを意識することは少ないことが分かった。

<sup>66</sup> 2015年8月11日、倉田哲郎へのインタビュー。箕面市役所本館 応接室にて。

<sup>67</sup> 2015年7月16日、秋田啓子へのインタビュー。箕面市立市民会館 会議室にて。

## (2)行政側の分析

行政が「交流」を支援するためには、他団体とのつながりをつくり、中間支援としての役割を担う必要がある。箕面市文化振興事業団 20 周年事業で行った市民参加演劇などはその典型例であり、劇団「すずしろ」のメンバーと市長が交流し、つながりを持つきっかけとなった。

劇団の取り組みを振り返れば、2010 年のニューヨーク公演では、現地の NPO 団体 Elders Share the Arts とコンタクトをとり<sup>68</sup>、高齢者同士での交流会も開いた。全国シニア演劇フェスティバルの開催も、同世代で演劇活動をしている団体との交流が目的であった。劇団発足以後、同世代との交流の機会を多く持ってきた点は評価すべきである。

しかし、それ以外に行政機関として劇団と他団体をつなげる取り組みはなされていない。個人レベルでは交流を促す動きが見られた。とりわけ設立に尽力した市職員の杉山は、劇団員が地域の人たちと交流することが重要だと考え、出演者と観客と一緒に議論する場を設けていた。杉山の意図は、同劇団の活動を「人生のお手本」として、地域の人たちに自己の人生のあり方を見つめ直すということであった。

しかし、杉山が他部署に異動になってからは公演後に交流の場を設けることはなく、劇団として外部とつながりを持つ機会が少なくなっている。行政としては、劇団と他の市民団体がつながるネットワークづくりに向けて、施策を展開していく必要があるだろう。

## 第 6 章 結論

### 6-1 シニア演劇の可能性

前章では、劇団「すずしろ」および行政支援の状況を「蓄積」「表現」「交流」の 3 つの側面から分析を行った。浮かび上がったのは、劇団員が演劇活動を通じて、地域社会とのつながりを持ち始めていることである。しかし、一方で、劇団レベルでの「交流」の場が確保できていない点が課題として指摘できる。

市民参加公演と行政支援のあり方を論じた瀬藤(2005)は、市民の芸術活動には 3 つの段階があり、行政はそれぞれに

<sup>68</sup> Elders Share the Arts とは、1979 年に設立された、高齢者の芸術活動を支援する団体。芸術を利用して高齢者の創造性を引き出すプログラムを実施している。

適した支援をする必要があると述べている。市民の文化団体が自律的に活動している段階においては、次のステップとして各団体間が互いに交流できるような場を設定することが望ましいという<sup>69</sup>。

瀬藤を参考に劇団「すずしろ」の発展段階を考えると、劇団「すずしろ」の活動はすべて団員たちの手によって主体的に行われている。普段の定期公演はもちろん、ニューヨーク公演、シニア演劇フェスティバル、ラジオ番組への出演など数々の挑戦的な取り組みは、すべて自分たちで企画・立案したものである。行政やボランティアなど実現のために必要な支援者の獲得も自ら行っている。運営についても、月会費以外にフリーマーケットに出店したり、広告収入の獲得のために奔走したりと、自主的に資金調達を行っている。シニア劇団といっても、長年会社勤めをして管理職を経験している人や主婦として一家の切り盛りをしてきた人たちの集団である。指導者の倉田も「みんな立派な社会人だった人。お金のことなど、若い人がやっている劇団でいい加減にしていることも、きっちり決めている」と指摘しており<sup>70</sup>、外部の支援を必要とせず、自立した劇団運営が可能になっている。

今後、劇団「すずしろ」が地域に開かれた存在として活動を展開させていくためには、他団体との「交流」の場、具体的には、演劇以外の分野で活躍する同世代の高齢者たちや若い世代との交流、あるいは教育機関や福祉施設などへの訪問公演などの機会を増やしていくことが肝要である。

本章では、シニア劇団が交流の場を持つことによって、地域社会においてどのような役割を担い得るのか考察する。浮かび上がったことは、①高齢者の社会参加のきっかけをつくること ②他の高齢者のロールモデルになること ③高齢社会の問題を地域で共有する場になること ④シティ・プロモーションの役割を果たすこと ⑤演劇文化の振興に寄与することの 5 つである。

第 1 に、高齢者が社会参加を始めるきっかけづくりとして、シニア演劇が一定の役割を果たしている。個人的な興

<sup>69</sup> 瀬藤によれば、第 1 段階では、市民による芸術文化活動がそれほど盛んではない状況、第 2 段階では市民による自主的な芸術文化活動が芽生えている状況、第 3 段階では諸々の市民団体による自主的な芸術文化活動が盛んである状況を想定している。(瀬藤 2005、pp.134-136)

<sup>70</sup> 2015 年 5 月 8 日、倉田操へのインタビュー。箕面市内の喫茶店にて。

味関心から演劇活動を始めた高齢者が、演劇を通じた社会貢献に意識を向けるようになったことは注目すべきである。劇団員は演劇活動を継続するうちに、テレビドラマや映画に出演するようになったり、ラジオの DJ を担当することになったりと、それまでの人生では考えられないような活動に参加するようになった。高齢者が地域社会とのつながりを持つための、いわば「ゲートウェイ」として、劇団の存在意義があると指摘できる。

加えて、高齢者が積極的に外出して社会とのつながりを持つことは、高齢者福祉や生涯学習の側面からみても重要な意味を持つ。高齢者が表現活動を通じて生きがいを持ち、心身ともに健康に過ごすことは、介護給付費や医療費の削減にもつながるだろう。また、劇団の仲間ができることによって、いざというとき、互いにサポートし合える関係を築くこともできる。

第 2 に、シニア演劇が他の高齢者の地域参加を促すためのロールモデルとなる点である。秋田啓子が述べた「これからの高齢社会を生きていくうえでの 1 つのモデル」を、他の高齢者に対して提示することができる。団塊の世代が一斉退職を迎えた 2007 年から 8 年経つが、高齢者が充実した生活を送るための環境整備は遅れている。いまだ、地域に高齢者が活躍できる場が少ない現状は変わらず、老年期をどのように過ごすかという問題を多くの高齢者が抱えている。

同劇団に期待する点の 1 つとして市長が「他の高齢者に与える影響」を挙げたように、シニア劇団が精力的に活動することで、退職後の生きがいを見つけられない高齢者にも刺激を与えることができるだろう。公演を観た高齢者の感想からは、「自分も頑張ろうと思った」などの感想が多く、公演から一定の刺激を受けている。また、劇団の先輩が活発に活動する姿を見て、「こんな風に年を取っていけばいいのか」と今後の目標ができたという団員もいた。高齢者が明るく元気に生活している姿を見せるだけでなく、「高齢者でもやればできる」「可能性はある」というメッセージを発信することは、他の高齢者にとっても励みになるはずである。

第 2 章で述べたとおり、演劇の特性は特別なスキルのない素人でも気軽に参加できる点にある。劇団「すずしろ」の事例を振り返れば、それまで演劇経験のなかった団員が、劇団内の演劇活動を通じて劇団外へと活躍の場を広げてい

た。誰でも参加できる場としてシニア演劇の存在意義があると考えられる。

第 3 に、高齢者を取り巻く社会的課題を、地域で共有する場を形成できる。団員のインタビューでは、演劇を通じて高齢化社会や老化の問題について考える機会になるのではないかと期待する団員もいた。実際、筆者は 12 月 6 日の第 7 回本公演を観劇した。観客の大部分は高齢者だったが、生と死をテーマにした芝居に自己の人生を考えさせられたようで、終演後、「身につまされた」と出演者に感想を語っていた。シニア劇団の公演を通じて、自分たちの生活や社会のあり方を考えるきっかけとなっている。

地域の活動においては、多様な主体が参加することが望ましい。高齢者が参加することは、より健全な社会を目指すうえで必要なことであり、普段接する機会の少ない若者世代への刺激にもなる。現状では観客の多くは家族や友人で、同世代から共感を得ることが多いが、今後より若い世代が関わりを持つことができれば、市職員の杉山尚輝が目指していたように、高齢社会の課題を、高齢者世代だけでなく、地域全体の問題として議論する場をつくることができるだろう。

第 4 に、シティ・プロモーションとしての可能性である。市長は箕面市の売り込みや知名度向上のチャンスとして捉え、同劇団を「箕面市特命大使」に任命するなど、活動を支援してきた側面がある。市職員の杉山は、市の生涯学習センターが実施した事業の成果であることを対外的に PR するため、劇団の活動を外部に紹介する際には、必ず「箕面市中央生涯学習センターの市民企画講座から生まれた」ことを明言するように、劇団と約束している。実際に、同劇団は高齢者のアマチュア劇団がニューヨークで公演を果たしたということで、テレビや新聞など様々なメディアに取り上げられてきた。近隣自治体の文化施設でも、箕面市といえば劇団「すずしろ」がある地域というイメージもたれるまでになっている。箕面市のような中小規模の自治体にとっては、劇団「すずしろ」のような自律して活動を展開させていく文化団体を育むことは、市外に対する文化発信としても重要である。

高齢者が生き生きと活動している姿を見せることは、地域住民が地元へ愛着を持つうえでも重要である。中川幾郎は自治体文化政策の目的の 1 つに市民・地域のアイデンティティ形成を強調しているが、地域アイデンティティの創

出は対外的な文化発信と裏表の関係であるという(中川2001、p.67)。劇団「すずしろ」の場合でも、ニューヨーク公演の壮行会で80万円のカンパが地域住民から集められたことから、劇団「すずしろ」がいわば「地域の顔」として認められていることが分かる。

第5に、地域の演劇文化振興としての可能性である。事例研究からは、高齢者の鑑賞者開拓と若手演劇人の育成という2つの可能性が指摘できる。これまで高齢者は伝統文化の継承者として重宝される側面があったが、今後は現代芸術を支える大きな潜在的消費者としても高齢者の存在は重要である。人口比率から考えても、これからの芸術活動を若者だけで支えるのは困難であり、高齢者が積極的に鑑賞者に回することで、芸術活動を支えていくことが期待できる。演劇文化の発展を考えれば、最も重要なのは、演劇を鑑賞し、批評する消費者の存在である。その点、劇団「すずしろ」の団員たちは、自ら演劇を始めたことで演劇鑑賞の機会が増え、俳優や舞台技術者など専門家に対する理解も深めていた。若者に独占されがちな現代演劇の世界に高齢者が参入することの意義は大きい。

さらに、地域の演劇文化を支えるという意味では、地域で活躍する演劇人を確保することにも役立っている。倉田操は劇団「すずしろ」のニューヨーク公演を機に、地元大阪へと拠点を移した。これは、東京などの大都市へ人材が流出することを防いだことを意味する。倉田にとっては、シニア劇団の指導が演劇活動を継続していくうえでの重要な収入源となり、演劇人としてのキャリア形成に大きく影響していた。若手演劇人がシニア劇団の指導者として経験を積み、それが収入の確保やキャリア形成につながることは、若手芸術家の育成にも役立つはずである。倉田が俳優として出演する舞台公演には、劇団「すずしろ」の劇団員たちもチケットを買って観劇する。シニア層をターゲットに芸術普及活動を進めていくことは、地域の芸術文化活動を支える人材を支え、育てることにつながっていく。

## 6-2 シニア演劇の発展条件と課題

前節では、シニア演劇の可能性について述べた。本節ではシニア演劇が今後さらに発展していくために、どのような条件が必要なのか整理したい。今回の調査から、劇団「すずしろ」の成功には様々なアクターが力を発揮していたことがわかった。以下、4者のアクターに焦点を当て、それぞ

れどのような役割を持っていたのか整理していく。

第1には、高齢者が主体となって活動することである。代表的な人物が秋田啓子である。秋田は持ち前の行動力を活かして様々な企画を立案し、実現のために奔走した。支援や協力を得るために、交渉を行い、細かい調整はほとんど秋田が担当している。その結果、行政やラジオ局などとのネットワークを築きあげ、劇団が活躍できる場を広げるに至った。地域の主要な文化団体として、行政や他団体に認められるまで劇団「すずしろ」を成長させた背景には、秋田の持つ人脈の広さがあった。

倉田操が指摘するように、団員らはみな社会人としてキャリアを積んできた高齢者であるため、会計や外部との交渉など運営に関する事務仕事は、自分たちでこなすことができる。自主的に劇団会則をつくり、毎年12月には総会も開いて1年間の決算を行っている。自治体の財政状況も厳しいなかで、市民が主体的に活動していることは、活動を継続していくうえでも重要な点である。

第2には、演劇人が専門的な演技指導を行うことである。指導者の倉田操が果たした役割のうち最も重要なのは、演劇作品の質を高めることであった。倉田は演劇に関する専門的な知識を活かして演技指導を行い、公演の質を一定の水準にまで高める点で貢献している。その結果、単なる「お茶会」では満足しない意識の高い集団を作り上げることに成功し、市内外からも評価を得られるレベルにまで劇団が成長した。

演劇人ならではの活動支援もある。ニューヨーク公演、ドキュメンタリー映画の製作、HEP HALLでの公演などは倉田による発案で実現した企画である。素人の高齢者では生まれない発想で、発信活動に大きく寄与している。倉田は専門家としてのパイプを駆使して、ニューヨーク公演で現地の協力者を探したり、脚本講座の講師を見つけたりするなど、様々な場面で支援者を獲得してきた。秋田だけでは実現し得なかった取り組みも多いだろう。

第3には、行政の関わりである。行政は市民のアイデアに社会的な意義を見出し、活動に協力した。生涯学習センター職員の杉山尚輝は、劇団「すずしろ」の活動に「高齢者の生きる手本」として捉え、劇団設立後も公演機会をつくるなどの支援を行った。市長・倉田哲郎は劇団「すずしろ」をシティ・プロモーションのチャンスと位置付け、活動を支援した。市民活動の芽を育て、自主的な活動を支

援する官民協働の取り組みである。活動の継続・発展には両者の間で Win-Win の関係を構築することが不可欠だと考えられる。

第 4 には、外部からの支援である。まず、マスメディアに取り上げられたことが、劇団の広報だけでなく、団員らにとって大きな自信となっていることも指摘できる。他の高齢者への影響力やシティ・プロモーションの観点からみても、メディアに取り上げられることは大きな意味があった。また、地域住民からの支援を受けられるようにすることも重要なことである。秋田が地域住民等から多くの支援を受け、劇団の社会的な役割を考えるようになったことを考えれば、行政だけでなく、いかに多くの人々から応援を取りつけるかがポイントとなるだろう。

一方で、今後シニア演劇が地域に開かれた存在として活動を展開させていくうえでの課題も発見できた。ここでは、2 点を挙げる。

第 1 に、継続性を考慮した場合の人材確保が課題としてあげられる。高齢者が個人的な満足感を得ること、あるいは演劇文化の振興だけがシニア劇団の活動目的である場合、多くの人にとっては、劇団の活動維持を支援する必要性が感じられないかもしれない。しかし、前節で指摘したように、シニア劇団が地域の課題解決のために貢献できるとすれば、劇団が地域で活動を継続していくことは地域住民にとっても望ましいこととなるだろう。

継続性の観点から事例を振り返ると、劇団「すずしろ」の成功は秋田、倉田、市長など特異な人物によって支えられており、属人的性格が強いことから、不安もある。同劇団の活動は、ほとんど劇団代表の秋田啓子と指導者である倉田操の 2 人のアイデアと、それぞれの持つ個人的なネットワークによって成功している。しかし、秋田も高齢であり、いつ代表の座を譲ることになるか分からない。秋田の穴を埋めるのは容易ではないだろう。

理解のある演劇人の確保にも課題がある。倉田は演技の理論を独自に学び、現在でも俳優向けワークショップや講習を自ら受講し、スキルの向上を目指しているが、演劇の世界では体系的に演技を学ぶことのできる場が非常に少なく、演技指導の方法も確立されていない。それゆえ、演劇の技術を素人に向けて活かそうとする演劇人も少ないのが現状である。演劇を地域社会の課題解決のために役立てようとする演劇人の育成が求められる。

第 2 に、交流の場をいかにして用意するかである。シニア劇団がより地域社会に開かれた存在として、社会的な役割を果たすためには、劇団内部や親しい間柄で完結するのではなく、他世代や他団体と交流する機会を持っているかどうか重要になってくるだろう。地域社会との接点を持ち、積極的に交流を図っていくことが求められる。

しかし、本研究で実施した劇団員へのインタビューからは、劇団外部との交流活動を行っている様子を一部確認できたものの、活動内容には個人差があった。劇団レベルでの交流があまり活発に行われていない点に課題がある。

筆者は交流の場をつくる主体として、行政やNPOなど外部の中間支援組織に期待したい。そもそも劇団員が活動する動機は基本的に自らが演劇を楽しむことであり、交流を目的とした集団ではない。たとえば、倉田は劇団の活動を若い世代につなげたいと考えているが、それに対して秋田は異なる見解を示す。「私は若者に対して発信する気はない。若い人と一緒にやっても脇役にされるし、自分たち中心の芝居をやりたかった。若い人にお邪魔かけないから、ほっといて、自立してやるから、というつもり」と話している<sup>71</sup>。あくまで自分たちの活動を大切にしたいという思いが活動の根底にある<sup>72</sup>。

劇団員たちは孫の世話や家族の介護など多忙な生活を送っており、稽古を重ねて公演をするだけでも大変な苦勞である。様々な理由から退団・休団する人が多く、メンバーの入れ替わりは激しい。だからこそ、外部から交流を促す役割を持つ存在が求められる。劇団だけでは展開していくことが難しい交流の側面を補っていく必要があるだろう。

劇団「すずしろ」の場合、行政が交流促進の役割を担いうる立場にあった。前述のとおり、市民の自発的な行動をサポートし、活動が軌道に乗り、自立した運営ができるまでに成長させたことは行政としての大きな成果である。しかし、設立後どこまで関与するのかについては、判断が難しい。市長が同劇団を応援する理由を振り返ると、第 1 が他の高齢者に与える影響力、第 2 が市の知名度向上であった。どちらも、地域社会全体にとっても益するところがあ

<sup>71</sup> 2015 年 7 月 16 日、秋田啓子へのインタビュー。箕面市立市民会館 会議室にて。

<sup>72</sup> 一方、前節で述べたように、秋田自身もニューヨーク公演を機に考え方が変わった。第 3 者の介在によって、劇団が地域に開かれていく可能性があることが指摘できよう。

る。自然発生的なものに任せるのではなく、シニア劇団を地域の資源として捉え、戦略的に協働体制をつくることも必要になってくるだろう。

シニア劇団の活動を単なる余暇対策に留まらせないためにも、異なる世代を交えてワークショップを企画したり、学校や福祉施設で公演の機会をつくったりするなど、劇団活動を地域と結び付けていく取り組みが望まれる。行政側からのアプローチとしては、市民の活動を後追いで支援していくだけでなく、地域で生まれた市民の文化芸術団体とどのように連携を図っていくのか、協働によってどのようなことが実現可能なのかを考えていく方法もあるのではないかと考える。

以上、本研究ではシニア演劇を題材に、高齢者の芸術文化活動がもたらす社会的価値について考察し、今後に向けて発展条件と課題を提示した。今後、ますます高齢化は進み、地域の文化活動を担っていく主体として高齢者への注目は高まる。魅力ある地域文化の創出に向けて、多様な主体が協力していくことが求められるだろう。本研究が、高齢者向けの文化事業を行おうと試みる団体、施設、自治体等の参考になれば幸いである。

## あとがき

学部時代、筆者は早稲田大学文化構想学部で近現代戯曲を研究し、日常的に劇場へ足を運んで演劇作品を鑑賞してきた。演劇の持つ芸術的な価値を体感する日々を過ごしていた。しかし、自身が演劇への思いを募らせるほど、一般社会の演劇に対する評価との乖離があるように思われ、戸惑いも感じていた。次第に演劇作品そのものではなく、演劇が地域社会とどのように関わり、どのような効果をもたらすのかという点に関心を持つようになり、本研究科への進学を決意した。

当初の研究計画では自治体設置の演劇稽古場の現状と課題を調査し、芸術家の創造環境を整備することが地域の人々にどのような効果をもたらすのか、研究する予定であった。テーマは大きく変わったように見えるが、演劇と地域の関わりを考えるというテーマは変わることがなかった。

筆者は、演劇の持つ教育的効果に注目した。高度な情報化社会が到来し、パソコンや携帯電話を介して他者とつながることに慣れてしまった現代において、生身の身体を通じたコミュニケーションである身体表現の重要性は増して

いる。一方、教育的効果といった場合、想定される対象は子どもだけでないと筆者は考える。しかし、実際には仕事や子育てなどに追われる多くの人々にとって、表現する場を確保するのが難しい現状がある。そのため、定年退職を迎え、時間と気持ちに多少の余裕があり、芸術表現の場を求める高齢者に注目することとした。

今回、シニア演劇を題材に、地域社会における高齢者の芸術文化活動が果たす役割を考察した。シニア演劇がもたらす効果について十分に検証ができたとは言いが、その可能性を提示することができた。演劇がどのように社会に役立つのか、という問いに対して、若干なりとも答えを導くことができたのではないかと考えている。

しかし、本研究には課題も多い。1つには、シニア演劇が地域社会にもたらされる効果について、仮説の提示に留まっており、効果の検証にまで至っていない点である。今回はシニア演劇の活動の実態がどうなっているのか、調査する必要があると考えたために、劇団「すずしろ」の劇団員、指導者、行政に対して詳細なインタビューを行うことにしたが、他の劇団への調査までは調査が及ばなかった。1つの事例から結論を導き出したため、本研究から得られた知見を新たな仮説として、他劇団、他ジャンルなどとの比較研究や統計的な手法を用いた研究を行って、効果の検証をしていく必要があると考えている。

2つには、事例の特殊性を考慮しなければならない点である。本文でも述べたが、劇団「すずしろ」が拠点とする箕面市は1人当たりの課税対象所得額が大阪府でトップの高さを誇る都市で、裕福な世帯が多い地域として知られている。学歴も比較的高い地域と予想される。今回はシニア演劇の成功事例として劇団「すずしろ」を研究対象に選定したが、研究結果を一般化していくためにも、他の地域でも参考になる点と参考にできない点を精査していく必要がある。

3つには、本研究が劇団員へのインタビュー調査が中心となり、行政組織の課題にまで踏み込めていない点である。シニア演劇の活動を支援する意義は、高齢者福祉的な側面、社会教育的な側面、文化振興的な側面が混在しており、多様な発展可能性を持っていよう。しかし、実際には縦割り行政の弊害もあり、柔軟な対応をしていくのは難しい。本研究で事例とした箕面市も、社会教育担当部局が中心となって劇団の設立・自立まで支援していたが、その後、福祉

担当部局などと連携した取り組みを行う動きはみられない。市長が他の高齢者の活動をリードしていく存在として劇団「すずしろ」の存在意義を認めているだけに、他部局との連携が行われないのは残念である。公共政策として高齢者の芸術文化活動を支援していくための自治体の体制づくりを検討する必要があるだろう。以上の3点は今後の研究課題としたい。

しかし、いずれにせよシニア演劇は可能性の宝庫であり、福祉、医療、教育、観光、まちづくりなど他領域と連携をはかることで様々な発展が期待できる。わが国は欧米諸国と比べても非常に速いペースで高齢化が進んできた。課題先進国と言われるわが国が、高齢者が活力を持って暮らしている姿を世界に向けて発信していく意義は大きい。シニア演劇が注目されるようになったのは2006年以降のことで、まだ取り組みは始まったばかりである。一時の流行になることのないよう、さらなる発展を期待し、今後も継続して活動を見守ってきたい。

## 謝辞

修士論文を執筆するにあたり、多くの方々からご指導・ご協力を賜りました。お世話になったすべての方々に、この場を借りて感謝申し上げます。劇団「すずしろ」の秋田啓子様、倉田操様、劇団員の皆様方に深く感謝致します。インタビューへの協力、資料の提供など、調査研究のために多大なるご協力を賜りました。また、箕面市長の倉田哲郎様、同市職員の杉山尚輝様、公益財団法人箕面市メイプル文化財団理事長の一階広充様には、ご多忙にも関わらずご協力頂けたこと、感謝申し上げます。また、本研究では言及できませんでしたが、プレ調査としてインタビューにご協力頂いた朝日恵子様、金沢市民芸術村市民ディレクターの井口時次郎様、シニア劇団 Ag クルー指導者の高田伸一様、かんじゅく座の鯨エマ様には、シニア演劇の現状や課題についてご教授頂きました。

主指導の松本茂章先生には、人文学研究から社会科学研究の世界へ飛び込み、右も左も分からない状態であった私を修士論文完成まで導いて下さったこと、心より感謝申し上げます。また、副指導の根本敏行先生をはじめ、文化政策研究科の先生方には、丁寧なご指導・ご助言を頂きました。厚く御礼申し上げます。

その他、いつも相談に乗って下さった院生の皆様、様々

な形で研究のサポートをしてくださった松本研究室の皆様、特に修士1年の大上美来さん、木村彩乃さん、桐山大空さん、中村紗貴さんには多大なるご支援を頂きました。本当にありがとうございました。

最後に、大学院への進学を応援し、学費や生活費の援助をして頂いた両親に心より感謝申し上げます。大学院生活の2年間、多くの方からご支援を賜りましたこと、感謝致します。

## 参考文献

### (1)書籍・雑誌・論文等

- 朝日恵子(2011)「シニア演劇の現状報告」『上方芸能』179号,pp.11-17
- 朝日恵子(2015)「シニア演劇、その後」『上方芸能』195号,pp.19-23
- 石川久(2011)「自治体改革の視点とコミュニティ政策」『淑徳大学研究紀要.総合福祉学部・コミュニティ政策学部』vol.45,pp.51-81
- 今井治人(2006)「アマチュア・オーケストラの社会学」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』11巻1号,pp.45-63
- 歌川光一(2015)「社会教育・生涯学習行政と地域アマチュア芸術文化活動」宮入恭平編『発表会文化論 アマチュアの表現活動を問う』青弓社,pp.67-90
- 江澤和雄(2013)『超高齢社会』における高齢者の学習支援の課題『レファレンス』第63巻,第8号,国立国会図書館調査及び立法考査局, pp.5-33
- 片桐恵子(2006)『退職シニアと社会参加』東京大学出版会
- 川口淳一(2002)「介護老人保健施設での演劇活動」『月刊社会教育』第46巻第10号,pp.35-39
- 川本直義(2010)「公共施設における開かれた利便供与の枠組みに関する研究 ―市民吹奏楽団を題材とした考察」『文化経済学』第7巻第2号(通算第29号),pp.17-30
- 古賀弥生(2011)『芸術文化がまちをつくるⅡ ―地域活性化と芸術文化―』九州大学出版会
- 古賀弥生(2015)「演劇によるホームレスのためのコミュニケーション講座の実践と検証」『活水論文集 文学部編』第58集,pp.123-147
- 小林真理(2010)「文化政策における公共的諸問題 領域の拡大と未解決の課題」山脇直司・押村高編『アクセス 公共学』日本経済評論社,pp.137-156
- 坂本雅俊(2008)「高齢者福祉サービスにおける教養と娯楽の施策についての考察」『長崎国際大学論叢』第8巻, pp.179-191

- 清水裕之(1999)『21世紀の地域劇場 パブリックシアターの理念、空間、組織、運営への提案』図書印刷
- 鈴木渉(2008)「成人音楽活動に関する一考察 —アマチュア・オーケストラの活動を中心に—」『山形大学紀要(教育科学)』第14巻,第3号,pp.123-140
- 関沢英彦(2004)「団塊世代の引退と消費市場」樋口美雄・財務省財務総合研究所編著『団塊世代の定年と日本経済』日本評論社,pp.253-273
- 瀬藤康嗣(2005)「公共ホールにおける住民参画運営と市民参加公演」中矢一義監修『公共ホールの政策評価 —「指定管理者制度」時代に向けて』慶應義塾大学出版会,pp.99-146
- 瀬沼克彰(1996)『新しい余暇と社会参加活動』大明堂
- 瀬沼克彰(2010)『高齢者の生涯学習と地域活動』学文社
- 曾田修司(2006)「アートNPOとのパートナーシップによる自治体文化政策の可能性:アートNPOの「専門性」と地方自治体の「コミットメント」をキーワードとして」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第4巻,pp.9-28
- 曾田修司(2007)「公立文化施設の公共性をめぐって —『対話の可能性』に、共同体的価値の形成と参加の保証を見る視点から—」『文化経済学』第5巻第3号(通算第22号),pp.47-55
- 辻浩(2013)「高齢者の自己実現と学習」小林文人他編『日本の社会教育・生涯学習 —新しい時代に向けて—』大学教育出版,pp.180-190
- 徳永京子(2013)『我らに光を —さいたまゴールド・シアター 蛭川幸雄と高齢者俳優41人の挑戦—』河出書房
- 中川幾郎(2001)『分権時代の自治体文化政策 —ハコモノづくりから総合政策評価に向けて—』勁草書房
- 畑潤・草野滋之編(2007)『表現・文化活動の社会教育学:生活のなかで感性と知性を育む』学文社
- 林容子(2004)『進化するアートマネジメント』レイライン
- 細川美香(2002)「地域における舞台芸術創造活動の展開過程」『社会教育研究』第20号,pp.55-78
- 前田信彦(2006)『アクティブ・エイジングの社会学 —高齢者・仕事・ネットワーク—』ミネルヴァ書房
- 牧野篤(2009)『シニア世代の学びと社会 大学がしかける知の循環』勁草書房
- 松本茂章(2011)『官民協働の文化政策 人材・資金・場』水曜社
- 間野百子(2003)「高齢者の社会参加とセルフ・ヘルプ活動 —北米におけるグループワークの展開」佐藤一子編『生涯学習がつくる公共空間』柏書房,pp.152-163
- 村山友江(2002)「字誌への取り組み…自文化の記録」『月刊社会教育』第46号第8巻,pp.18-24
- 山本珠美(2007)「市民参加型舞台芸術に関する序論的考察」『香川大学生涯学習教育研究センター研究報告』第12巻,pp.29-50
- (2)新聞記事
- 「(列島360度)91歳女優も活躍 シニア世代、劇団で輝く」朝日新聞東京朝刊 2008年1月27日付
- 「中高年劇団ブーム 日常忘れ舞台で変身」読売新聞大阪朝刊 2009年10月20日付
- 「箕面の劇団『すずしろ』 平均67歳 夢のNY公演」読売新聞大阪朝刊 2010年6月8日
- 「シニア劇団、NYへの道 ドキュメンタリー、地元大阪で上映」朝日新聞大阪朝刊 2011年6月3日付
- (3)白書・行政資料等
- 国立社会保障・人口問題研究所(2012)「日本の将来推計人口(平成24年1月推計)」
- 内閣府(2007)『国民生活白書 平成19年度版』時事画報社
- 内閣府(2010)『高齢者社会白書 平成22年度版』佐伯印刷
- 内閣府(2014)「市区町村別 人口・経済関係データ 課税対象所得:総務省『市町村税課税状況等の調べ』(納税義務者数一人当たり)」
- 内閣府(2015)『高齢社会白書 平成27年度版』日経印刷
- 文部科学省(2011)「『子どもたちのコミュニケーション能力を育むために ~「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取組~』コミュニケーション教育推進会議審議経過報告」
- 文部科学省(2012)「長寿社会における生涯学習の在り方について —人生100年 いくつになっても学ぶ幸せ 『幸齢社会』—」
- 箕面市総務部情報政策室(2015)『平成27年度版 市勢年鑑』箕面市
- 箕面市(2015)「第6期箕面市高齢者福祉計画・介護保険事業計画」
- (4)Webサイト (いずれも最終閲覧日 2015年12月25日)
- アトリエ劇研シニア劇団 HP <http://www.gekken.net/senior/>
- かんじゅく座 HP <http://kujira-enter.sakura.ne.jp/kanjukuza/>
- 劇団「すずしろ」 HP <http://suzushirodaikon.seesaa.net/>
- 劇団菜の花座 HP <http://www9.plala.or.jp/nanohanaza/>
- 劇団満座楽 HP <http://ameblo.jp/22sinia/>
- さいたまゴールド・シアター HP [http://www.saf.or.jp/gold\\_theater/](http://www.saf.or.jp/gold_theater/)
- シニア演劇ネットワーク HP <http://senior-engeki.net/>

シニア演劇 web HP <http://s-geki.net/>  
のべおか笑銀座 HP <http://nobeokashowginza.web.fc2.com/>  
八老劇団 HP <http://hamada-sumiko.qee.jp/>  
らくらく演劇塾 HP <http://www9.plala.or.jp/nanohanaza/>

#### (5)インタビュー

秋田啓子へのインタビュー,2015年7月16日13時-15時,箕面市立  
市民会館 会議室にて  
一階広充へのインタビュー,2015年8月1日11時30分-13時00  
分,箕面市中央生涯学習センター 会議室にて  
大野雅子へのインタビュー,2015年9月11日17時-18時,箕面市立  
市民会館 ロビーにて  
小田秀子へのインタビュー,2015年9月8日10時-11時,箕面市立  
市民会館 ロビーにて  
亀井真美へのインタビュー,2015年9月8日17時-18時,箕面市立  
市民会館 ロビーにて  
川島兼一へのインタビュー,2015年9月4日17時-18時,箕面市立  
市民会館 会議室にて  
倉田哲郎へのインタビュー,2015年8月11日15時-15時30分,箕  
面市役所本館 応接室にて  
倉田操へのインタビュー,2015年5月8日10時30分-12時30分,  
箕面市内の喫茶店にて  
糺葛美へのインタビュー,2015年9月14日12時-13時,箕面文化・  
交流センター ミーティングルームにて  
小財順子へのインタビュー,2015年9月7日12時-13時,箕面文化・  
交流センター ミーティングルームにて  
杉山尚輝へのインタビュー,2015年8月11日16時-17時,箕面市内  
の喫茶店にて  
塚原幸明へのインタビュー,2015年9月14日11時-12時,箕面文  
化・交流センター ミーティングルームにて  
豊田旭へのインタビュー,2015年9月14日17時-18時,箕面文化・  
交流センター ミーティングルームにて  
長谷川明子へのインタビュー,2015年9月8日12時-13時,箕面市  
立市民会館 ロビーにて  
濱田夢子へのインタビュー,2015年9月11日10時-11時,箕面市立  
市民会館 ロビーにて  
日宇京子へのインタビュー,2015年9月7日11時-12時,箕面文化・  
交流センター ミーティングルームにて  
森脇公子へのインタビュー,2015年9月11日12時-13時,箕面市立  
市民会館 ロビーにて

山下洋子へのインタビュー,2015年9月7日17時-18時,箕面文化・  
交流センター ミーティングルームにて  
吉田祥子へのインタビュー,2015年9月7日10時-11時,箕面文化・  
交流センター ミーティングルームにて  
和田準子へのインタビュー,2015年9月8日11時-12時,箕面市立  
市民会館 ロビーにて

#### (6)その他

劇団「すずしろ」会則  
劇団「すずしろ」公演アンケート 第3回本公演「この度はご愁  
傷様です」(2009年)  
劇団「すずしろ」公演アンケート 劇団「すずしろ」10周年記念  
公演「葉ごろも」(2014年)

図表

表1 全国のシニア劇団リスト

設立年	団体名	運営主体	指導者	所在地		年齢	目的・特徴
1973年	八老劇団	行政	浜田澄子	大阪府	八尾市	60歳以上	老人福祉センターが設立。生きがい、痴呆予防が目的。
1975年	おばあちゃん劇団「ほのお」	市民		静岡県	藤枝市		民生委員が設立。高齢者の生活課題を啓発する。
1987年	ばっちゃん劇団	市民(行政支援)		富山県	高岡市		高齢者学級の人形劇講座から設立。
1991年	福祉劇団 鶴亀	市民		宮城県	柴田町		福祉サービスの仕組みや必要性を普及・啓発する市民ボランティア団体。
1995年	シルバーボランティア劇団かがやき	市民(行政支援)	ごとうてるよ(劇団名古屋)	愛知県	名古屋市	55歳以上	生涯学習センターの演劇講座から設立。演劇を通じたボランティアを行う。
1996年	芝居工房 来るくる座	市民		兵庫県	神戸市	50歳以上	老人ホームなどへの訪問公演を行う。
1997年	楽塾	演劇人	流山寺祥	東京都	新宿区	45歳以上	著名人が主導する劇団。ワークショップ等も積極的に行う。
1998年	60歳からの芝居づくり／もりげき演劇アカデミー盛岡劇場	行政	藤原正教(演劇集団九月とアウラー)	岩手県	盛岡市	おおむね60歳以上	盛岡劇場主催の単年度の演劇講座。継続参加可。
1999年	NPO 法人発起塾(シニアミュージカル)	演劇人	秋山シュン太郎	大阪府(他5都市)		50歳以上	QOLの実現を目指してプロの指導を受ける。京都、和歌山、神戸、岡山、名古屋に展開する。
1999年	みちのく高齢者劇団交流事業	行政	中野健(劇団支木)	岩手県+秋田県	西和賀町+北上市+横手市	60歳以上	複数の市町が共同して実施する単年度演劇講座。継続不可。
2000年	福岡市高齢者市民劇団シルバーパンサー	市民(行政支援)	氷室敬子、東是信、堤瑞穂	福岡県	福岡市	60歳以上	福岡市が稽古場・公演会場を提供する。
2001年	劇団・567倶楽部	演劇人	小林哲郎(劇団ふおるむ)	兵庫県	西宮市	50～70歳代	地元劇団が主催する演劇教室。
2001年	劇団あしたば	市民(行政支援)	山崎三郎(劇団静芸)	静岡県	静岡市	55歳以上	公民館主催の演劇教室から設立。地元の民話など。
2001年	河辺わさび座	市民		秋田県	秋田市		テーマは社会問題。コミュニティ祭を始め、自治会、学校、企業などから公演依頼を受ける。
2002年	座・たくあん	市民(行政支援)		北海道	浦河町		「北海道舞台塾」をきっかけに設立。
2002年	劇団イースターズ／劇団はっぴーず	市民		兵庫県			兵庫県健康生きがいづくり協議会の劇団活動事業。高齢者に対する防犯や認知症予防が目的。

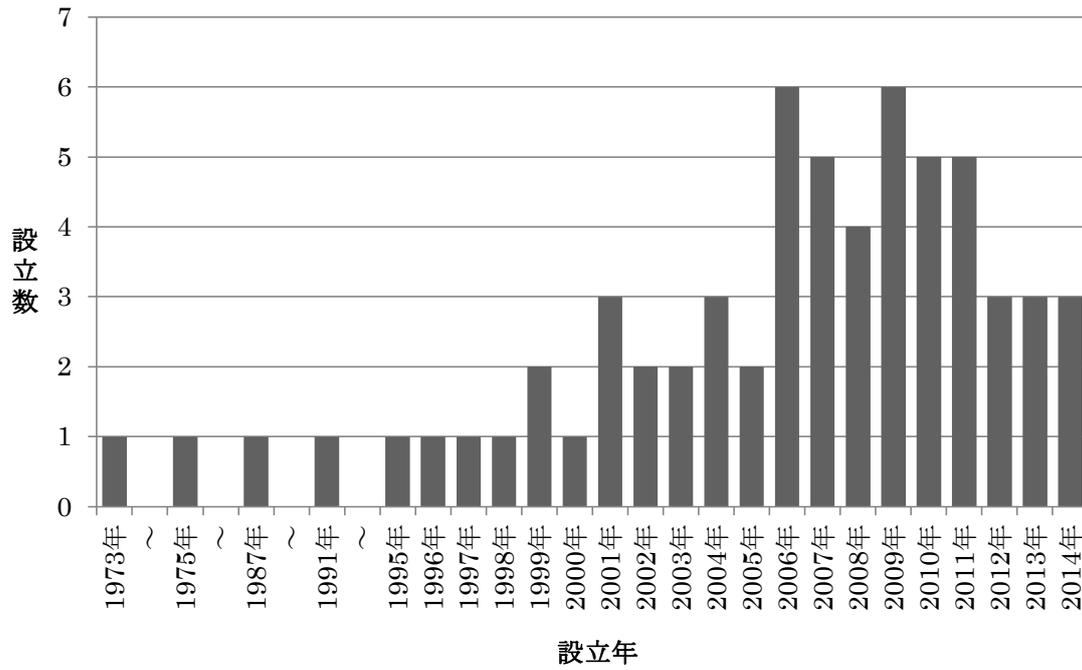
2003年	高齢協劇団 エルダーキャッツ	市民	大西恵(劇団マクダレーナ)	香川県	高松市	55歳以上	香川県高齢者生活協同組合の会員有志で設立。2006年まで資金援助を受けていた。
2003年	劇団「銀春座」	行政	新野新(放送作家)	大阪府	岸和田市	50歳以上	浪切ホールの子業として設立。単年度で参加者を募集する。
2004年	劇団「すずしろ」	市民(行政支援)	倉田操	大阪府	箕面市	60歳以上	生涯学習センターの演劇講座から設立。2010年にニューヨークで公演。
2004年	劇団笑劇	市民		青森県	おいらせ町	50歳以上	劇団鶴亀を観て設立。日本公証人連合会から感謝状を受ける。
2004年	NPO 法人大正浪漫一座	市民		三重県	松坂市		老人施設、保育園などでの訪問公演。2008年NPO法人化。2009年台湾で公演。
2005年	演劇倶楽部『座』『座・シェイクスピア』	演劇人	壤晴彦(演劇倶楽部『座』)	東京都	新宿区	40歳以上	単年度のWS。
2005年	生駒市シニア劇団らくらく演劇塾	市民(行政支援)	杉本進、熊本一(シアター生駒)	奈良県	生駒市		コミュニティセンターの演劇講座から設立。地元劇団による設立・指導。
2006年	かんじゅく座	演劇人	鯨エマ(劇団海千山千)	東京都	新宿区	60歳以上	30代の演劇人4名が立ち上げたシニア劇団。クラスが複数に分かれる。
2006年	A・S・O・B塾	演劇人	芹川藍(劇団青い鳥)	大阪府	八尾市	制限なし	衣装・小道具・パンフレットからチケットの販売まで、公演にかかわることを全て団員で行う。
2006年	さいたまゴールドシアター	行政	蛭川幸雄	埼玉県	さいたま市	55歳以上	彩の国さいたま芸術劇場の自主事業。設立時から注目され、他の劇団に影響を与えた。
2006年	金沢市民芸術村ドラマ工房 Agクルー	行政	地元演劇人による指導	石川県	金沢市	50歳以上	金沢市民芸術村の自主事業。年度ごとに参加者を募集する。
2006年	シニア劇団のべおか笑銀座	市民(行政支援)	実広健士(劇団ぐるーぶ連)	宮崎県	延岡市	50歳以上	延岡総合文化センターの事業から独立。現在も支援を受ける。地元演劇人が指導。
2006年	釧路シニア劇団「南の風」	市民		北海道	釧路市	50歳位	現代の世相を反映したテーマを扱う。
2007年	トムスタジオ「45歳からのアクターズスタジオ」	演劇人	松本陽一(TOMMSTUDIO)	東京都	豊島区	45歳以上	毎年、参加者を募集する演劇講座。
2007年	坊っちゃん劇場 完熟「一期座」	演劇人	わらび座の俳優・演出家	愛媛県	東温市	40歳以上	坊っちゃん劇場が設立。伊予弁を使用する。
2007年	劇団かぶつ	市民		東京都	八丈島	60歳以上	八丈島の民話・八丈言葉の伝承。
2007年	アトリエ劇研シニア劇団 星組／銀宴／そよ風ペダル／恍惚一座	演劇人	細見佳代／田辺剛／筒井潤／山口茜	京都府・大阪府	京都市／高槻市	50歳以上	京都のNPO劇研の事業として設立。2011年には高槻現代劇場で設立。劇団によって活動目的や講師が異なる。
2007年	ミュージカル劇団ケセラ・セラ	市民(行政支援)		京都府	京都市		京都市右京ふれあい文化会館の「熟年アカデミー」から設立。

2008年	高齢者演劇集団チャレンジャー	市民	原田一雄	静岡県	富士市	55歳以上	元高校教諭が主宰。本格的な舞台公演を目指す。
2008年	王子倶楽部	演劇人	高崎隆二(俳優)	神奈川県	相模原市	40歳以上	社会福祉的な劇団に。
2008年	劇団キンダースペース シニア ワークショップ	演劇人	キンダースペースの 俳優・演出家	埼玉県	川口市	45歳以上	単年度の講座で継続可。劇団員による指導を受ける。
2008年	はつらつ健康劇団	市民(行政支援)		静岡県	下田市		健康をテーマにした寸劇を上演。市事業の健康指導劇を引き継ぐ。
2009年	文学座プラチナクラス	演劇人	文学座の俳優・演出 家	東京都	新宿区	40歳以上	8か月の稽古～修了公演まで行う。毎年継続した募集はしていない。
2009年	幸齢者	市民		福井県	福井市	60歳以上	地域の公民館や老人施設などで公演。
2009年	かと れあ project	演劇人	大久保則子(俳優)	宮城県	仙台市		演劇・朗読を通じて、芸術文化の普及を目指す。
2009年	劇塾マデーラ	演劇人	浅香寿徳	徳島県	徳島市		元高校演劇の顧問が主宰。
2009年	SAGA パーフェクトシアター	演劇人	村井国夫、辻萬長	佐賀県	佐賀市	45歳以上	県内出身の俳優が主宰。
2009年	TY Prime Company	演劇人	横内正(俳優)	東京都	渋谷区	50歳～75歳 まで	プロの指導を受けながら、テレビや映画出演などもプロモートする。
2010年	シニア演劇大学	演劇人	木津川計など	大阪府	大阪市	50歳以上	3年間限定のプログラムで、演技だけでなく各種講座が開かれる。
2010年	高崎市市民演劇	行政		群馬県	高崎市	50歳以上	高崎市が主催で、毎年市民から公募を行う。
2010年	シニア劇団「満座楽(まんざら)」	市民(行政支援)	大石和彦(元教員)	宮城県	仙台市	60歳以上	健康福祉局介護予防推進室「介護予防、生きがいづくり」事業により設立。その後2012年独立。
2010年	石見国くにびき18座	市民(行政支援)		島根県	浜田市		高齢者大学の社会文化科卒業生が結成。体力の維持と生きがいづくりが目的。
2010年	NPO 法人シニア劇団浪漫座	市民		静岡県	浜松市	55歳以上	2012年、NPO法人化。老人施設や子供会などで巡回公演。
2011年	シニアミュージカル劇団「一季」	演劇人	福本ひとし	東京都	新宿区	制限なし	発起塾の東京支部が撤退したことを受けて立ち上げ。
2011年	劇団 樺人	市民		東京都	板橋区	制限なし	本格的な戯曲に挑戦。芸能スクールOBの有志5人によって立ち上げ。
2011年	劇団やんま	市民		宮城県	仙台市		仙台の劇作家・演出家から指導を受けたのち、独立。せんだい10-BOXなどで公演。
2011年	くしろ高齢者劇団	市民		北海道	釧路市		アマチュア劇団から指導を受け、独立。アイヌ語などに特徴。
2011年	足利市民劇団 燦 SAN	市民(行政支援)	加納朋之(文学座)	栃木県	足利市		足利市民プラザの演劇講座から設立。質の高さを求めながら、生きがいづくりを目指す。
2012年	劇研 GO! 楽座(ごらくざ)	市民	雁坂彰(元青年劇場 の俳優)	埼玉県	さいたま市		大きな劇場やスタッフを使わず、低予算で活動できる工夫をしている。

2012年	波瀾ばんばん座	市民		千葉県	市川市	60歳以上	主宰者は朗読教室や健康教室の講師。
2012年	シニア劇団「おやくじら」	演劇人	西城貴史(銀色のくじら)	福岡県	福岡市	50歳以上	劇団「銀色のくじら」のシニア部として結成。
2013年	シルバー劇団「子子孫孫」	演劇人	堤幸彦、多田木亮祐	愛知県	名古屋市	65歳以上	プロの俳優がレッスンをを行う。
2013年	南アルプス桃源座	市民(行政支援)	清野知之(B-B LACK)	山梨県	南アルプス市	50歳以上	全国大会の誘致を機に、市の呼びかけで結成された。
2013年	俳優大学	演劇人	日本映画大学	神奈川県	川崎市	50歳	日本映画大学による俳優養成講座。
2014年	BB☆GOLD	市民(行政支援)	佃典彦(劇団B級遊撃部隊)	愛知県	名古屋市		演劇練習館アクテノンの演劇講座から設立。
2014年	P PK48	市民	大川義行(劇団ルネッサンス)	千葉県	千葉市	50歳以上	NPO法人「高齢社会をよくする女性の会」の主催により、オーディションを行った。
2014年	菜の花プラザシニア団	演劇人(行政支援)		山形県	川西町		川西町フレンドリープラザで開講した演劇講座の修了生が、劇団菜の花座に加入。

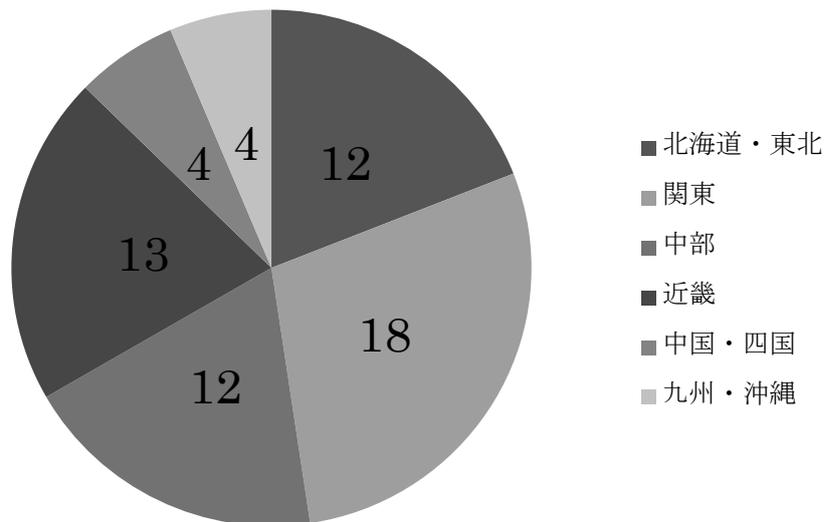
(各ホームページ・新聞記事検索等による調査をもとに筆者作成)

図1 シニア劇団の設立年グラフ



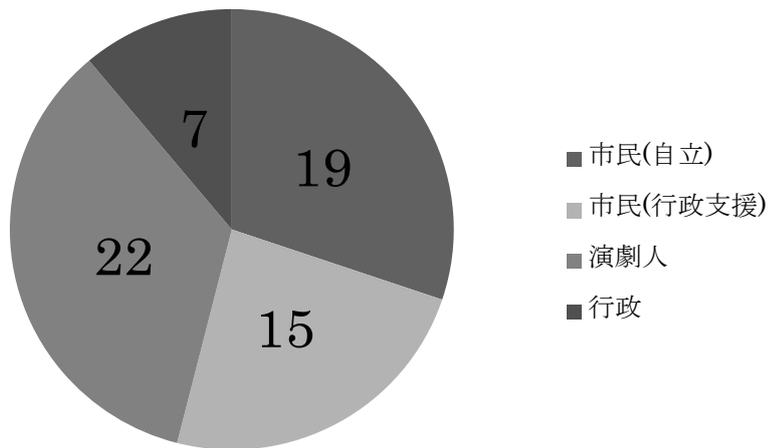
(表1をもとに筆者作成)

図2 シニア劇団の都道府県別グラフ



(表1をもとに筆者作成)

図3 シニア劇団の運営主体別グラフ



(表1をもとに筆者作成)

表2 劇団「すずしろ」団員のプロフィール

	入団年	年齢	居住地	性別	学歴	同居人	職業
A	2004年(12年目)	72	箕面市	女性	大卒	夫婦2人	主婦
B	2006年(10年目)	80	大阪市	女性	中卒	娘	事務職(70歳まで)
C	2008年(8年目)	67	茨木市	女性	大卒	夫婦2人	日本語教師(非常勤)
D	2008年(8年目)	73	箕面市	女性	中卒	独居	事務職
E	2009年(7年目)	71	池田市	女性	高卒	2世帯	主婦
F	2010年(6年目)	68	豊能町	男性	大卒	夫婦2人	教師(小学校)
G	2012年(4年目)	66	豊中市	男性	大卒	夫婦2人	サラリーマン(商社)
H	2012年(4年目)	64	豊能町	女性	短大卒	夫婦2人	主婦
I	2012年(4年目)	64	箕面市	女性	高卒	独居	主婦(家主)
J	2012年(4年目)	61	箕面市	女性	大卒	夫婦2人	主婦
K	2012年(4年目)	61	池田市	女性	短大卒	夫婦2人	主婦
L	2013年(3年目)	70	川西市	男性	大卒	夫婦2人	サラリーマン
M	2013年(3年目)	72	箕面市	女性	大卒	夫婦2人	主婦
N	2013年(3年目)	67	池田市	女性	短大卒	独居	主婦
O	2014年(2年目)	63	豊中市	女性	大卒	独居	教師(中学校)
P	2015年(1年目)	70	大阪市	女性	短大卒	独居	自営業(接骨院)

(2015年9月時点のインタビュー調査をもとに筆者作成)

表3 劇団「すずしろ」公演実績一覧

	活動実績	場所
2005年10月	試演会「煙が目にしみる」	箕面市立東生涯学習センター
2006年2月	依頼公演「煙が目にしみる」	大阪府公民館大会（豊能ブロック大会） 特別公演「煙が目にしみる」
2006年11月	第1回本公演「見果てぬ夢」	メイプルホール小ホール
2007年3月	依頼公演「見果てぬ夢」	神戸須磨 香風寺
2007年8月	ワークショップ「60歳からの演劇入門教室」	箕面市文化振興事業団共催事業
2007年9月	依頼公演「見果てぬ夢」	神戸西代 大法寺
2008年2月	第2回本公演「煙が目にしみる」	メイプルホール小ホール
2008年6月	ワークショップ「第2回60歳からの演劇入門教室」	箕面市文化振興事業団共催事業
2009年3月	客演「箕面山大瀧燃ゆる」	箕面市文化振興事業団20周年記念事業
2009年5月	第3回本公演「この度はご愁傷様です」	箕面市メイプルホール小ホール
2009年11月	依頼公演「煙が目にしみる」	箕面市立東生涯学習センター共催事業 （生涯学習推進事業）
2010年1月	依頼公演「煙が目にしみる」	大阪府公民館大会
2010年4月	ニューヨークブロードウェイ壮行公演「煙が目にしみる」	箕面市共催
2010年6月	ニューヨーク公演	
2010年9月	客演「地下鉄道」	第10回日本音楽療法学会学術大会
2010年10月	第一回箕面国際シニア演劇フェスティバル	
2011年3月	依頼公演「この度はご愁傷様です」	箕面市立東生涯学習センター主催
2011年6月	ドキュメンタリー映画「晴れ舞台はブロードウェイで！」特別上映会	メイプルホール小ホール
2011年9月	第4回本公演「太陽のあたる場所」	メイプルホール小ホール
2012年1月	依頼公演「煙が目にしみる」	貝塚市浜手地区公民館
2012年2月	ワークショップ「60歳からの演劇入門」	
2012年3月	ドキュメンタリー映画「晴れ舞台はブロードウェイで！」東京渋谷アップリンクにて公開	
2012年6月	ドキュメンタリー映画「晴れ舞台はブロードウェイで！」大阪九条シネ・ヌーヴォにて公開	
2012年6月	ドキュメンタリー映画「晴れ舞台はブロードウェイで！」宝塚シネ・ピピアにて公開	
2012年7月	依頼公演「煙が目にしみる」	豊能町ユーベルホール
2012年9月	第5回本公演「このゆびとまれ」	
2012年10月	ドキュメンタリー映画「晴れ舞台はブロードウェイで！」宝塚シネ・ピピアにてアンコール上映	
2013年8月	第6回公演「さよならパーティ」「煙が目にしみる」	メイプルホール小ホール
2014年3月	客演「ラジオ講座」	タッキー816みのおエフエム
2014年10月	劇団「すずしろ」10周年記念公演「葉ごろも」	梅田ヘップホール
2014年11月	依頼公演「葉ごろも」	豊能町ユーベルホール

（劇団ホームページをもとに筆者）

表4 劇団員へのインタビュー結果のまとめ(入団のきっかけ)

	生きがい・自己実現	同世代との交流	社会とのつながり	健康への配慮	その他
A		・病気になり、同世代の人とつながりたいと思った			
B	・前の劇団では達成感がなく、満足できなかった	・若い人たちとは気迫が違う。わいわいやりたかった	・退職後、家で何をしていたか分からない。外に出ないとだめと思った ・再就職の代わり		・お金がかかるものはやれない
C	・仕事を辞めたとき、何かしたいと思った	・話が合う人たちと何かしたい ・みんなで何かをつくるということをしたい			・学生時代の演劇の楽しさが忘れられなくて
D			・箕面に引っ込むこと、刺激のない生活が不安だった	・老化防止にいいと思った	
E	・人生の最後に本当にやりたいことをやりたい ・前の劇団で充実した稽古ができなかった	・若い人がいい役につく。さみしい思いをする			・奈良の劇団に所属していたが、遠いため続けられなかった
F	・定年を迎え、何をしようかと考えたとき、若いころに諦めた演劇をしたいと思った				
G			・家にずっといて、どこかのコミュニティに入らなければ、ぬれ落ち葉になると思った	・健康不順があった	
H	・まったくやったことのないことをやりたいと思った				・ボランティアで必要になる、大きな声を出す練習をしてみたい

I		<ul style="list-style-type: none"> <li>・偶然、団員と知り合って誘われた</li> <li>・色んな年代層だと、お年寄りの役しか回って来ない</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しそう、面白そう。活動の盛り上がりを感じた</li> </ul>
J	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ここで人生が終わるとしたら悲しい。もう一回何かやりたいと思った</li> </ul>				
K	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の人生、自分のために使ってこなかった。このまま終わるのはつまらないと思った</li> </ul>				<ul style="list-style-type: none"> <li>・1つの人生しか知らないのが口惜しい</li> <li>・受け入れてくれるのがずしろしかなかった</li> </ul>
L	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己実現。チャレンジ</li> <li>・昔から好きな演劇活動をした</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>・退職し、家にずっといる。人との関わり合いがほしい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体を動かしたい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自宅から近い</li> </ul>
M	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もともと好きだった演劇を本格的にやりたくなった</li> </ul>				<ul style="list-style-type: none"> <li>・自宅から近いので見学した</li> </ul>
N	<ul style="list-style-type: none"> <li>・知らない世界への興味</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同じ年代の人なら気楽だと思った</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・市の広報をみて、引かかった</li> </ul>
O	<ul style="list-style-type: none"> <li>・退職後、何かしようと思った</li> </ul>				<ul style="list-style-type: none"> <li>・講師が知り合いで安心感もあった。友人からの勧めもあった</li> </ul>
P	<ul style="list-style-type: none"> <li>・70年生きてきた懺悔と反省</li> <li>・いろんなことを学びたい、勉強したい、自分を磨きたい</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・身体を柔軟にする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・もともと芸能が好きだった</li> </ul>

(インタビュー調査をもとに筆者作成)

表5 劇団員へのインタビュー結果まとめ(活動を通じて生まれた変化)

	内面的変化			同質的な集団での交流		社会参加への萌芽		健康増進	その他
	生きがい・自己実現	認められる喜び	老いのイメージ	居場所・つながり	家族・友人	社会貢献への意識	活動の広がり		
A		・自分が認められるのは、いくつになっても喜び				・(カンパが集まり)シニアにも社会的な役割があると考ええるようになった ・シニア劇団が活動する意味を地方都市から発信していくことを意識している	・(著名な映画監督からオファーを受け)普通の人ではあり得ない体験や人脈ができるのが嬉しい		
B				・友達ができた	・子や孫が来てくれて嬉しかった		・演劇ワークショップや学生映画等への出演を通じて若い世代とも触れ合う機会がある	・ここに来なくてはいけないと思うからか、身体も丈夫	
C	・私自身を生き返らせてくれる感じがする。何かに打ち込める時間が持てるのはすずしろのおかげ						(自分たちが楽しければいいという感じ。CM出演もしていたが、待ち時間が長くてすぐ辞めた)	・姿勢をよくしろと言われ、買い物中でも意識を持つようになった	・いつか芝居に役立てようと思って、人の動作とかしゃべることなどを気を付けて観察するようになった
D	・笑顔が大きくなった。近所の人に、変わったと言われる ・ずっと続けるうちに、できたという喜びを与えてくれる							・先生から聞いたことを基礎にして歩いている。健康につながっていると思う	

E		・認められるのが嬉しさにつながる		・力を合わせることに楽しくなってきた ・普通の習い事より一段深く付き合っている		・元気をもらおうと言う観客が多い。 ・年をとっても、やればできるということを示している	・立命館大学映像学部の卒業制作に出演	・芝居するために必要な柔軟性と筋力アップに気を付けている	・他人の話を聞いて挙げるできるようになった
F	・自分で一生懸命奮い立てていくようなことが内面的にないと、つらくなる					・高齢者の生き方を考えさせる。すずしろを知って、何かやってみようとする人もいる	(体調を崩したので、劇団外の活動はなかなかできない)		・泣くことも笑うことも喚くことも、お芝居なら思い切りできる ・人を見る目が変わる。色々な生き方を認められるようになる
G	・自分がいきいきなれた	・自分がしたことで、みんなが喜んでくれるのが嬉しい			・家でごろごろせず外に出ているので、妻は喜んでいる。成果を見せられるので、関係も良好になった		・コミュニティFMのためにラジオドラマを書いたり、パーソナリティを務めたりしている	・高血圧が治った。精神的にだいぶよくなった	・ラジオドラマを書いたり、学生時代に熟中した俳句を再開したりした ・テレビドラマをみて勉強している
H			・年を取るのが怖くなくなった		・長いこと会っていない友人と再会する機会ができた ・活動を知った息子が感心してくれた		・ずっと夢だったラジオのDJをしている ・倉田先生の知り合いが製作した短編映画に出演した。カンヌ映画祭に出品された		
I	・考えて演技することや、いろいろな表現ができて人に伝わるのが面白い			・仲間ができた。密度の高いつながりができるのは他の団体ではないと思う	・家族が来るのは、自分にとってイベント。自分のことが話題になって盛り上がるのは嬉しい	・老齡なのに、若い人たちのように盛り上がっているのは、周りにも伝わると思う。勇気を与える	・ラジオドラマやNHKドラマのエキストラに出演した		

J	・お仕着せのゲームではなく、自ら選択して表現できる	・誰かから見てもらえているというのが嬉しい			・古い友達も来てくれた。30年ぶりの再会だった	・市の施設や活動を知るようになり、市民と役所のつながりを考えるようになった		・体操とかするの で、首の調子がよくなった	・勉強のために、芝居をよく観るようになった
K	・忙しくて無理もするが、日々の生活にハリができる		・シニア観が変わった。目標ができた	・人とのつながりが一番。暇つぶしではなく、ひとつの目的に向かっていくつながりがいい		(社会の中で、ある程度の役割を果たしたので、もう自分本位で考えていいのではないかと)			・社会的な立場を離れて、本来の自分でいられる ・舞台をつくるために色んなプロフェッショナルがあることに気付いた
L	・少しでも自分を高めていきたいという気持ちが生まれた					・同じ世代のお客さんが多く、地域の活性化、老人の活性化になる		・できるだけ歩く。 1 駅少なくして歩くなど心がけている	
M	・何かしているという充実感 ・好奇心が戻り、何かに感動しようという気持ちが出てきた					・地域の人たちと高齢化について一緒に考えることができるのではないかと思う	・ラジオに出たり、いろいろな広がりがある	・身体を動かすことの大切さを学んだ。よく歩くようになった	・自分自身が老いに向かって、どう向き合っていくか考える
N				・1つの作品に向けてわいわいやるのが楽しみ				・健康面を意識して心がけるようになった	・役を通して、改めて自分を見つめなおす ・芝居を観るようになった。細かいところも注目するようになった
O				・共通点を持つ同年代と話ができる。自分の居場所ができた			(ほとんどつながりはない。他の劇団と交流することも特にない)	・健康面では考えるようになった。休まないで行かなくてほしいと思うから。公演前は絶対抜けられない	・自分と全然違うものになれる。非日常的なことが面白い
P	(備考：入団して1ヶ月のため、特になし)								

(インタビュー調査をもとに筆者作成)

表6 中川モデルを参考にした分析結果

		劇団「すずしろ」	行政側
蓄積	個人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・団員：自主稽古(トレーニング、舞台・映画鑑賞)</li> <li>・倉田：本格的な指導</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・杉山：設立支援、発表機会の提供</li> </ul>
	組織	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日々の稽古</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・設立支援(市民講座の実施)</li> <li>・稽古場の減免措置</li> <li>・共催事業(団員募集のための演劇ワークショップ)</li> </ul>
表現	個人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・団員：公演活動への参加、ラジオ番組の発信活動</li> <li>・秋田、倉田：活動の企画・立案・支援の獲得</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・市長：イベントの支援</li> <li>・杉山：発表機会の提供</li> </ul>
	組織	<ul style="list-style-type: none"> <li>・公演活動(定期公演、依頼公演)</li> <li>・発信活動(メディアからの取材、みのおエフエム)</li> <li>・イベント(全国大会)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・共催事業(記念公演、全国大会)</li> <li>・施設利用の減免措置</li> <li>・防災キャンペーンへの協力依頼</li> </ul>
交流	個人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・団員：劇団外の活動に参加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・杉山：ディスカッションの場をつくる(異動してから、交流の機会が少なくなった)</li> </ul>
	組織	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ニューヨークでの国際交流</li> <li>・シニア演劇フェスティバルの開催(交流の機会が少なくなっている)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シニア演劇大会の支援</li> </ul>

(インタビュー調査をもとに筆者作成)